清朝時代のモンゴル族教育と言語教育

中央民族大学民族教育出版社助教授
（比較教育社会学コース客員研究員）　ハスバガン

The Mongolian education and language education in the Qing dynasty

HASBAGANA

This summary paper classifies the Mongolian education and language education in the Qing dynasty into four of areas such as the official school, school education, district education and temple education and be making a initial study. First of all, the process of analysis collect certain information from some separate historical articles and analyze the characteristics of the education and language education of each and lead it to several conclusion finally.

The policy of Qing dynasty to the Mongolian is assimilation and the education is the important part of the whole policy. The aim has nothing to do but make the faithful nations to the emperor. However, as the part of world civilization, it is true that the education, especially the new education in the last stage of the Qing dynasty promoted the social and cultural development in the Mongolian district, except being used by the ruler as a political instrument. The change and cultural conversion of the Mongolian society advanced gradually and sometimes compromised during economic and cultural collision. As a social phenomenon and cultural load body the language has changed during the change of the society and school education accelerated the change. The direction of the change shows the trend of shift from multilangual model to bilangual models and after all, such trend is decided to the change of the economy, politics, nationality relationship of the whole society.

目　次

はじめに
1．官学と言語教育
　A　八旗官学
　B　地方官谷
　C　官学とその言語教育の特徴
　　1．メンバーの多民族性
　　2．教授言語と言語教育の多言語性
　　3．生徒選抜の封建等級と定員数
　　4．教育内容の軍事性
　　5．言語教育の重要度の変化
　　6．教育主体の官僚的性格
　　7．公費による教育
2．学堂教育と言語教育
　A　地方学堂の設置と言語教育
　B　京師学堂の設置と言語教育
　C　多言語教科書の使用状況，編集，出版と発行
　D　蒙蔵回地方興学章程の公布とモンゴル学堂システムの規範
　　1．学堂システムと教員養成
　　2．行政と経費
　　3．言語教育モデル，教育目標
　　4．言語教育の実行とプロセス
　　5．その他の科目
　E　学堂教育とその言語教育の特徴
　　1．学堂教育の承継性
　　2．学堂教育の開拓性
　　3．閉鎖的な伝統教育の突破と開放的な近代教育への唱え
　　4．学校教育システムの形成
　　5．言語教育と授業言語の変化
　F　言語教育モデル，転換方向とプロセス及び社会的諸要因との関係
　　1．言語教育モデル
　　a 満州語―モンゴル語―チベット語三語モデル
　　b 満州語―モンゴル語―漢語三語教育モデル
　　c モンゴル語―漢語二言語教育モデル
　　d モンゴル語―漢語―外国語三言語教育モデル

e 漢語モノリンガル教育モデル
f モンゴル語モノリンガル教育モデル
2．モデル転換とその傾向性
3．モンゴルに対する同化政策と教育政策
3．地方教育と言語教育
A　義学と言語教育
B　書院，書房と言語教育
C　私塾教育と言語教育
1．私塾の種類と性質
2．私塾の設置
3．私塾の分布とその条件
4．私塾とその言語教育モデル
4．寺院教育と言語教育
A　寺院教育と清朝のモンゴル対策
1．行政的分割
2．政治的分化
3．文化的籠絡
4．軍事的弾圧
5．精神的麻痺
B　寺院教育の流派と規模
1．流　派
2．分布と規模
C　寺院の経済力
1．寺院建設費
2．ラマ僧衆の日常生活支出
3．賞　与
4．寺院経済
5．信者からの寄贈
D　寺院の教育制度
1．教育目的の一貫性
2．教育年齢と段階
3．試験と学位制度
E　寺院教育とその言語教育特徴
1．言語威信の利用
2．教具とたとえの利用
3．集中，分節，漸進，修行原則
4．暗論，朗論，黙想，答弁
F　仏典翻訳と寺院教育のモンゴル文化への貢献
1．モンゴル語音声記号の発明と文字システムの改善
2．文法研究
3．仏教経典の翻訳と辞書編集，翻訳理論の発達
4．モンゴル語で書かれたモンゴル歴史，文学作品の出版
G　寺院教育の衰微
1．政治的策謀と仏教への恩寵
2．モンゴルの柔順と仏教に対する態度の変化
3．仏教への冷遇
4．政治と宗教連盟の瓦解
5．仏教遺産の二重性と文化対策の二重性
5．結　論
A　教育システム
B　教育宗旨
C　教育と文化の二重性
D　二つの文化影響の比較
E　文化転換の漸進的性格と言語教育モデル転換

はじめに

筆者がモンゴル族教育とその言語教育[1]にはじめて注意を払ったのは1997年のことであった。『民族教育研究』第二号には，内モンゴル自治区教育庁民族教育処処長によって書かれた「内モンゴル自治区民族教育の最大の問題，その原因および対策」という論文が掲載された。この論文によると，内モンゴルの民族学校は1980年から1995年までのわずか15年間に，小学校が1409校，中学校が142校，在校小学生が25643人，在校中学生が8663人減少して，モンゴル語で授業を受ける学生が少数民族在校生総数に占める比率でみるとそれぞれ23.7%（小学校），20.2%（中学校）下がったという。1999年9月に出版された『中国民族教育の50年』という本の第1章「内モンゴル民族教育の50年」でもこの事実が確かめられた。それによると，1996年に比べて，1997年には，内モンゴルにおいてモンゴル語で授業を受ける小学生が23256人減ったというのである。実は，モンゴル族の言語転用現象はそれよりずっと早い清朝時代から始まったのである。したがってモンゴル族教育の最大の問題，すなわち二言語使用および言語転用問題とその原因を明らかにするためには，まず清朝時代のモンゴル族教育と言語教育史を検討しなければならない。

これまで，清朝時代のモンゴル族教育と言語教育を全体的に分析したものは非常に少ない。研究資料も広範な歴史文献に分散しているので，本稿ではまず資料調査から着手して，清朝時代のモンゴル族教育システムを教育主体，つまり教育を起こす主体によって官学，学堂教育，地方教育，寺院教育といった四つの種類に分けて考察することにした。分析の方法は，上記の種類によってばらばらの文献から確実な情報を集めて，教育システムと政治と教育および社会文化変容との関係を中心に検討し，更にその中から何らかの代表的な特徴を抽出する。それに基づいて結論に，簡単ながらいくつかの理論的な

考察を行う。

清朝時代，特別の寺院教育を除いて，モンゴルの教育発展を促進した主な原動力が三つあると思われる。一つは，政府のモンゴル対策として実施されたモンゴルへの教化，同化方針と官吏養成である。その教育主体は官学と中央学堂教育を推し進めた清朝政府である。二つめは，モンゴル人自身が教育を手はじめとして，自民族を振興させようという希望である。このような教育の主体は主としてモンゴル地域の開明な人たちである。三番目は，漢族の影響，特に，「読書して官になる，学問して人に抜きん出る」という儒教思想の影響である。郷紳（地方の実力者）と一般民衆がこのような教育思想に影響を受けて，独特な教育主体になった。この三つの原動力の出発点が矛盾しても，教育客体すなわち人材養成という点で最終的に一致して一つの教育システムを形成している。この三つのうち，政府のモンゴル対策として実施された同化的教育宗旨が主導的な地位にあったと思われる。

清朝のモンゴル対策はいろいろあるが，その中で最も重要なのは「分封してその力を制約する，釈迦を崇拝させてその出生を制約する」（分封以制其力，崇釈以制其生），「借地養民実辺」などがある。分封した結果，盟旗制度が実施され，統一のモンゴル社会が分割された。釈迦を崇拝した結果，モンゴル人男子の40~50％がラマ[2]（お坊さん）になって，モンゴルの人口が激減した。借地養民の結果，昔からモンゴル人の生活基盤となっていた幅広い遊牧地が失われて，モンゴルの社会も，言語環境も変容するようになった。モンゴル族教育と言語教育もモンゴル社会と文化の一部分として，清朝のモンゴル対策に深く影響されて変容してきたのである。その中でも，宗教政策に比べて，移民政策はモンゴルの社会と文化変容に根本的な意味があると思われる。なぜならば，後者は社会メンバー，その構造と文化を置換させて，社会生活そのものに決定的かつ直接的，しかも永久的な影響を与えるからである。

1．官学と言語教育

A　八旗官学

清朝の官学とは主に八旗官学を指している。八旗というのは清朝の軍事行政単位で，すべて女真人，一部のモンゴル人と漢人を編入したものである。その基本単位は牛録で，1牛録の定員は3百人，5牛録から1甲喇，5甲喇から1旗ができて，その旗印の色で，黄，紅，藍，白と，それぞれに縁をつけることで正黄，正白，正紅，正藍，廂黄，廂紅，廂白，廂藍といった八旗に分ける。

清朝の支配者は開国当初から八旗子弟の教育を重視して，経典，軍事，国語（満州語）教育をともに重んずる方針をとり，文学を偏愛して，武芸を軽視するものは必ず処罰されると規定している[3]。皇太極がこの教育思想を更に発展させて，貝勒，大臣の子弟に読書させ，「学問をさせるのは彼らを礼儀作法に通じた，郡主に忠実で，上司に親しい人になるように養成して，朕の頼りにならしめるためである」と指摘して，戦争の勝敗は軍功より物分かりと忠実によるところが多いことを実例で説明した[4]。

清朝年間，モンゴル族の子弟は国子監官学（1644年設），景山官学，八旗左右翼世職官学，八旗教場官学，円明園翻訳官学（1732年設），咸安宮蒙古官学（1748年設），ロシア官学（1708年設），托忒学，チベット官学（1657年設），算学などの官学で勉強していたという[5]。官学の学制は1－5年が一般で，10年ほど勉強する人もいた。官学を卒業して，試験に合格した者が，中央と地方の書記官，翻訳，教習などの官吏として任用されるか，官吏候補になる[6]。乾隆12年（1747年）の咸安宮蒙古官学の教育内容を見ると，モンゴル文経書，阿利伽利字韻[7]，モンゴル文翻訳などが含まれていた。一年ほどの勉強で，翻訳ができるようになったら，モンゴル来文，訴訟具申書などを翻訳させて，もし満州文ができる者であれば，定員以外の貼写筆帖式[8]（書記官）として任用して，奨励する。雍正6年（1728年）に設置した円明園護軍営官学の学制は4年で，生徒が一旦任用されると，先生も一等（教習）に位置付けられて筆帖式に昇進して，そうでない者は出身旗に帰らせた。乾隆21年（1756年），円明園護軍営官学の在学子弟に満州文を勉強させて，教習も翻訳生から任用して，生徒が翻訳試験に合格して任用されたら，教習も筆帖式に昇進すると規定している[9]。乾隆40年（1775年）設置した健鋭営官学の学制は3年で，満州語のほか騎射等も勉強させていた[10]。

B　地方官学

八旗官学のほか，いろいろな地方官学が存在していた。「帰化城庁誌」によると，雍正5年（1727年）に都統丹津が文廟を建てて，雍正13年（1735年）には文廟の西側に土默特官学を設置した。この官学はモンゴル語専門の学校ではあるが，実は，その時当地に漢文が読める，あるいは漢文を勉強していたモンゴル人は珍しくなかったという[11]。

綏遠城官学は八旗満州，モンゴル人の修業するところで，乾隆50年（1785年），以前の五学（興，校，庠，序，

塾）のほか，満州語一漢語翻訳学を設けた。年齢15歳以上，20歳以下，国書と漢書ができる者を10人ずつ募集した[12]。

「綏遠通誌稿」が引用した「土默特旗誌」によると，本来土默特モンゴル人が漢文を勉強することは固く禁じられていた。出自を忘れないように公文書にモンゴル文を使っていたが，文廟を建てて，義学を設置して以来，徐々に漢文を勉強するようになった。最初，当地のモンゴル人に漢文が読める人はいなかったので，試験の規定にただ翻訳試験関係のものがあって，漢文で受験するときの対策はまだ検討されていなかった。しばらくすると，漢民子弟と一緒に受験するようになり，試験用紙も漢文とモンゴル文の区別がなくなったという。確かに，光緒（コウショ）3年と10年，山東道監察御史王賡栄（オウゲンルン）と山西巡撫張之洞（ジャンジドン）などが口外七庁に庁学を設置することを唱えて，帰化庁学が土默特官学から生徒2人募集して，その試験答案を礼部あるいは満州，モンゴル，漢文を扱う部門に送って，評定させるという方案を提出したことがあった。土默特モンゴル人がモンゴル語を失ってしまうと，この特別扱い政策も無効になったことは前記からもうかがわれる[13]。

伊克昭（イヘイジョウ）盟の「準格爾（ジュンガル）旗誌」によると，清朝のとき，準格爾旗全地域にわたってモンゴル語と文字が通用して，公文書が全部モンゴル文で記録されていた。王府や貴族の私塾教育においても，授業がモンゴル語で行われていた。漢族もモンゴル語を勉強して簡単なモンゴル語で話せるようになっており，モンゴル人と付き合うときにはモンゴル語を使っていた。清末から中華民国になると，漢民が大量に入境定住して，モンゴル人が却って漢語を勉強しなければならなくなった。公文書にも漢文が使われて，近代学校教育，いわゆる新学でも主として漢文漢語が教えられるようになった。モンゴル語を使用しているのが準格爾召，布爾陶亥（ボロトハイ）二郷だけであって，準格爾旗のモンゴル語レベルといえば，老人ならうまく話せるが，中年は大体話せるが漢語とモンゴル語の混じり言葉を頻繁に使う，若者は漢語しかできない，といった状態であった[14]。

康熙（コウキ）34年（1695年），黒龍江将軍薩布素（サブソ）が黒龍江地方官学を創設した[15]。光緒8年（1882年）には，満漢文官学が設置された[16]。教育内容には識字，習字，騎射などがある[17]。

C　官学とその言語教育の特徴

八旗官学と地方官学を概観すると，以下のような特徴が見られる。

1．メンバーの多民族性

八旗官学，モンゴル官学の生徒と教員は満州，モンゴル，漢といったいろいろな民族から構成されている。

2．教授言語と言語教育の多言語性

官学の生徒は満州語，モンゴル語，漢語などの多言語教育を受けるようになっている。漢族の儒学経典を中心に，二言語とか三言語の相互翻訳を通じて多言語を勉強するのが，その時の主な方法であった。モンゴル官学は主にモンゴル語と文字知識を専攻していたが，公文書翻訳者養成のため，モンゴル語と漢語，モンゴル語と満州語の二言語能力が要求されていた。満州語の能力が優先されていたのは満州族の政治的特権のほか，漢化による漢語転用で満州語が失われていた状況と関係があると思う。

3．生徒選抜の封建等級と定員数

官学に入れるのは文職五品，武職三品以上の官吏と貴族の子供とされている。清朝の官吏選抜制には，科挙試験と世襲二つのシステムが並行していた。モンゴル王公と貴族の子供の中，世襲できるものを除いて，他は科挙試験に参加するとか，官府に就職するのが主な進路であった。官学の定員に，例えば，満州人60名，モンゴル人20名，漢人20名といったように制限があって，年によって，定員数に変化があったのである。

4．教育内容の軍事性

八旗官学は軍事教育を非常に重視していた。清朝政府は八旗子弟が文学に熱中して，軍事技能が乱れることを防ぐため，八旗子弟が科挙試験に参加することを禁止した。しかし官吏教育と科挙試験の間には切り離せない関係があるので，ついに軍事科目が科挙試験の重要な内容になって，八旗子弟も試験に参加できるようになった。

5．言語教育の重要度の変化

もともと官学では言語と翻訳の科目が重視されていたが，科挙試験の誘導で，このような科目がだんだん無視されるようになった[18]。

6．教育主体の官僚的性格

教育主体の官僚的性格は官学の封建性と関係がある。官学は少数支配者集団の，世襲貴族と官吏養成を目指したエリート教育である。

7．公費による教育

官学の教育費用は清朝政府により支払われていた。それと対照的に，地方教育（義学，書房，私塾など）は地方官吏，商行，民衆など様々な財源で支持されていた。しかしモンゴル王公が設置した王府私塾（公塾とも呼べる）は官学と非常に近く，資金出所から言えば，私塾と官学の境界が曖昧になっている。こうした私塾にはもともと王公子弟に向けられたものが多かったが，他の子供

が公子王孫のお供として勉強し，旗府官吏の候補になっていたので，本稿では私塾として扱うことにした。

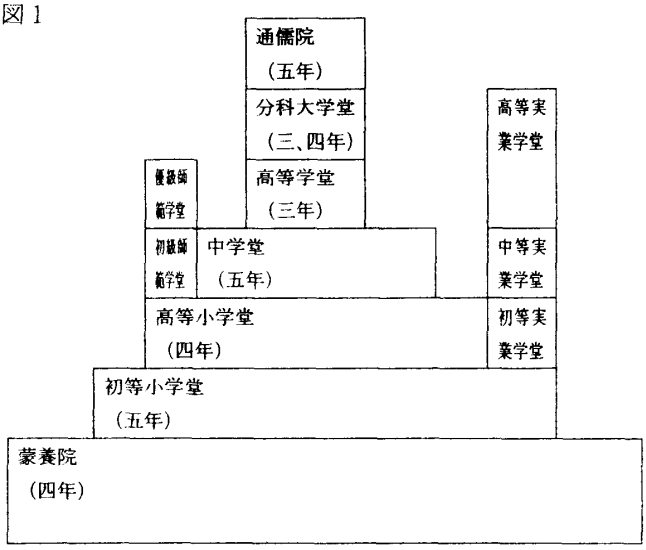
官学は清朝封建社会と封建制度の産物である。官学から学堂教育への革新は激しい変化を経ていた清朝末期の社会革新に推し進められたものであり，社会革新の先駆になったのである。

2．学堂教育と言語教育

20世紀のはじめから清朝の教育制度に大きな変化が起こり，近代学校教育が芽生え始めた。1840年のアヘン戦争から何度も失敗を重ねた清朝政府と，当時の進歩的な思想を持った人々は強国富民の希望を教育に寄せたのである。清朝が近代学校教育，つまりいわゆる新学を受けた国民と西方の科学技術をあわせて，崩壊しかけた古い制度を維持しようという努力は無駄になった。しかし教育の恵みで目覚めた民衆が社会を徹底的に革新して自由で民主的な，富み栄えた国を作る百年の奮闘を始めたのは事実である。モンゴル民族の教育もこのような背景の中，近代学校教育の実践を始めたのである。

光緒28年（1902年），「壬寅学制」が公布されて，「中学を体にし，西学を用にする」方針を打ち出した。光緒29年（1903年），「癸卯学制」が，「奏定学堂章程」の発布によって実行された。「癸卯学制」の学校システムは下図の通りである。

図1



初等小学堂の科目には修身，読経，講経，中国言語と文字，算術，地理，歴史，格致，体操などが設けられて，高等小学堂の科目には絵画が加えられていた[19]。

A　地方学堂の設置と言語教育

光緒28年（1902年），喀喇沁右翼旗札薩克[20]貢桑諾爾布がモンゴル近代学校の先頭を切って，崇正学堂を創設した。この学堂はモンゴル，漢族の子供を募集して，モンゴル，漢，日本人の教員がモンゴル語，漢語，日本語，ロシア語，算術，地理，歴史，書道，絵画，音楽，体育などの科目を教えていた。光緒29年（1903年），崇正武備学堂と毓正女学堂が設置された。旗府は3000ムーの禿山を賃貸して，その小作料を学堂の経費とし，生徒の衣食住費，学費，文房具費用など一切免除した。さらに子供が就学したら，その家族の戸口税を免除して，「納税役務解除」と書いた特許看板を玄関に掛けさせた。学堂から10里以内の女学生を輿で送り迎えし，昼食には生徒たちの口に合う麺類と肉を用意した。また大型遊園会では生徒の家族と旗民を招待し，学校施設，生徒の宿題帳，演劇，講演を見学させたり，お茶やお菓子でもてなした[21]。

経済的負担の解消，生活習慣の尊重と家族の納得はモンゴル地方で教育を拡大させる三つのキーポイントである。学堂はこのキーポイントを十分把握したので，応募する生徒がどんどん増えて，一度に400人を超えたという。

学堂には教室，宿舎，食堂，図書室などの施設が整っていただけでなく，「崇正学社」といった研究グループもあった。卒業生の進路を広めるため，旗府はいろいろ工夫した。生徒が卒業すると，進学・留学希望者を公費で内地学堂や海外学校へ送って，そうでないものを旗府に任用していた。1903年から1912年まで，合わせて600人あまりの生徒が卒業して，そのうち30人が北京，天津，上海，南京，保定に派遣されて，軍事，工業，鉄道，技術，測量製図，教育などを勉強し，8人が日本に留学した[22]。光緒30年2月（1904年），生徒の中学堂と大学堂への進学について貢桑諾爾布が中央政府に上申書を提出した[23]。貢桑諾爾布が起こした教育は自民族の復興を図った開放的な教育として，今でも高く評価されている。

貢桑諾爾布の崇正学堂，崇正武備学堂と毓正女学堂の他，昭烏達地域に設置された学堂には，光緒30年（1904年）の赤峰街文廟，魯班廟，馬王廟初等小学堂，女子学堂，克什克騰旗哈兆林の回民小学堂，33年と34年の接官庁，猴頭溝，古都河，烏丹鎮，財神廟郷，老府郷，元茂隆郷初等小学堂，敖漢旗王府学堂，宣統2年（1910年）の敖漢旗貝子府蒙文学堂，巴林右翼旗の普励学校などがあった。1911年まで，この地域に合わせて23箇所の小学堂が設置された[24]。私塾を改造して学堂にするため，光緒33年，赤峰県師範伝習所が創設された。承徳に道光8年（1828年）から熱河蒙古官学が存在したが，宣統3年

（1911年），承徳府蒙漢文師範学堂が設置された[25]。

貢桑諾爾布の崇正学堂と同時に帰綏では古豊書院が帰綏中学堂に改造された。これが光緒32年（1906年）に更に拡充されて，それに師範学堂と高等小学堂が付設された。帰綏学堂とそれに続いて設置されたいわゆる七庁の初高等小学堂にはモンゴル人の子供が通っていなかったわけではないが，主に漢族に向けられた漢語授業の学校であった。光緒30年（1904年），綏遠将軍が昔の啓秀書院の場所に綏遠中学堂を設置し，高等小学堂も付設した。翌年さらに初等小学堂，左右両翼各路蒙養学堂５箇所，半日学堂と満蒙学堂を設置した[26]。光緒33年（1907年）の将軍貽谷の上申書によると，帰化，綏遠に工芸（学堂）１箇所，陸軍中学堂，高級，初級，蒙養，半日，満州とモンゴル各学堂18箇所設置されていたという[27]。

満蒙学堂が４つの斎に分けられて，斎ごとに36－37人，満州，モンゴル文と四書を勉強していた。光緒32年の上申書によると，綏遠中学堂が八旗の子弟を募集して，学堂章程にしたがって，満州，モンゴル，外国語を教えて，蒙養学堂が満州語，漢語を教えて，生徒の中学堂進学準備をしていた。そのほか，蒙小学堂５箇所が八旗の子供を募集していた。その時，この３種類の学堂に合わせて500人あまりの生徒が勉強して，外国語の成績が満州，モンゴル文のそれより優れていたという。その後，国語を重んずるべしという学部の教書にしたがって，別に満州文学堂を設置して，それにモンゴル文学堂を付設するようにした。モンゴル文学堂を付設した理由として，綏遠はモンゴル地域に接しており，開墾他の拡大にしたがって，モンゴル人との交渉がますます多くなったから，翻訳人材が求められるようになったと上申書に説明がある[28]。

光緒32年（1906年），副都統文哲琿が帰化城の文廟のそばにあった満蒙官学（即ち，啓運書院）を蒙小学堂にした。翌年，帰化城副都統三多が蒙小学堂を高等小学堂にし，別に，城東の文昌廟に蒙小学堂を付設して，光緒34年学堂の名前を変えて，第一初等小学堂とした[29]。「綏遠通誌稿」によると，土黙特旗の官学には満州文とモンゴル文を勉強させて，旗民もモンゴル語を使っていた。だが，官学を高等小学堂に変えたために，モンゴル文とモンゴル語教育が止められたので，若者はモンゴル語で日常の挨拶もできなくなったという[30]。帰化城副都統麟寿が宣統３年（1911年）の上申書に，「土黙特旗が察哈爾（チャハル）と烏藍察布（ウランチャブ）のモンゴル地域に接しており，往来の公文書に満州文とモンゴル文を使うため，当旗の高等小学堂に満州，モンゴル分科を付設して，翻訳人材を養成するべきである。旗民が漢民と雑居し，満州語やモンゴル語の教育がおざなりになる恐れがあるので，民族の長所を守るべきである」と提案している[31]。これらの記録から判断すると，モンゴル語教育が帰化，綏遠，土黙特地域の学校教育から押し出されたのは大体光緒33年前後学堂教育が実施されてからと推定できる。

光緒31年（1905年），哲里木盟科爾沁（ジリムホルチン）左翼後旗の札薩克親王が皇帝の教書にしたがって，当旗の馬家屯に官立蒙漢小学堂を創設した。これはいわゆる麦林希伯（メーリンシペー）官学である。学監のほか，教員４人，その中日本人教官（体育）１人，モンゴル人１人，内地から招聘されてきた漢人秀才２人いた。生徒たちの衣食住および文房具などは学堂から供給され，五年生の科目には修身，国語，算術，体操，音楽，地理，歴史，自然などが含まれていた。生徒30人のうち，少数の漢人子弟を除いて，全部モンゴル貴族の子弟で，王府所属の８努図克（ノトグ）（郷にあたる）から指定されていた。貴族の子弟が学堂を嫌がって，お金まで出して他人の子供を雇って代わりに勉強させていた経緯で，平民の子供も初めて学堂に通うようになった。この学堂はわずか四期の学生を募集しただけで，まもなく解散した[32]。光緒32年（1906年），同旗の昌図（チャント）府城外に位置していた前忠親王祠に科爾沁左翼三旗蒙漢小学堂が設置された。学生，科目，教科書などが麦林希伯と同じで，学部の章程に従ったものである。最初，その学費は，親王の寄贈，旗民の寄与と家族に分担されていたが，光緒34年（1908年），教育公所がこの学堂を経営するようになった[33]。34年の統計によると，同年，この旗には師範学堂１箇所，学生30人，初等小学堂２箇所，生徒81人あって，歳入が10940両（白銀）に達したという。そのなか，寄贈金1549両，官府補助金8080両，学生納金1311両が含まれていた[34]。この２箇所の学堂を貢桑諾爾布の崇正学堂と比較してみると，あまり成功したとはいえない。その原因は，授業科目が内地の学堂とまったく同じで[35]，漢語と漢族の教育モデルをモンゴル人の子供に当てはめたからではないかと思う。教育に民族性がなく，自民族の言語教育が行わなければ，いくら供給制を実施して補助金を出しても，モンゴル民衆の納得と支持を得にくいということはこの事例から明らかになっている。

光緒32年（1906年），唐古特喀爾喀（タングダハラハ）旗が蒙古官学堂を設置して，34年（1908年），庫倫旗の札薩克ラマ達阿旺（フレーダアワン）巴勒丹（バヨダン）が興源寺に蒙漢学堂を設置した。宣統（セントウ）元年（1909年），東北三省総督錫良が「諭哲里木盟十旗興学勧業文」を公布して，公立学校，ラマ小学，家塾を同時に取り上げる方針を提出した[36]。同年，庫倫旗に漢文初高両等学堂が設置され，モンゴル，漢，回民の生徒を募集していた[37]。

宣統２年（1910年），科爾沁左翼前旗に既に両等小学堂が設置されていた。この学堂の言語科目には国文（漢文）とモンゴル文があって，国文は，小学堂の場合，毎週６時間，高等小学堂の場合，毎週４時間，小学堂より２時間減っている。モンゴル文は，小学堂の場合，毎週６時間，高等小学堂の場合，毎週８時間，授業時間が返って２時間増えている。教科書として，国文に商務印書館の初等小学国文教科書と文明書局の高等小学国文教科書を使って，モンゴル文に，初高等小学堂ともに「清文鑑」，三体国文書を使っていた。初高等小学堂には毎週１時間の習字課があって，漢字，モンゴル字を練習させていた。それに，読経，講経科目があって，小学堂の場合，毎週12時間，高等小学堂の場合，毎週９時間ほど，「四書集注」，「論語」（高等小学堂の場合は「孟子」）などを教えていた[38]。このようなカリキュラムは新学と旧学の交替を反映しているのが明らかである。モンゴル語授業の内容はちょっと古い感じがあるが，自民族の言語教育を学堂教育に編入して，発展させたのは望ましいことである。

喀喇沁左翼旗に初めて設置された学堂は光緒30年（1904年）の建昌県財神廟高等小学堂である。翌年，80処あまりの初等小学堂が建昌県に設置された。同年10月，喀喇沁左翼旗札薩克が公営子に啓蒙小学堂を設置した。その当時，清朝政府は「旗県分治」制度を実施し，県は漢民を管理する行政機関として存在したので，県の学堂教育の発展は旗のそれより遥かに早いということが前掲事実から推定できる[39]。同じ遼寧省に属する阜新県では，光緒33年（1907年），紅帽子，沙海，務歓地各地にそれぞれ高等小学堂を創設して，34年（1908年）旗府所在地に維新学堂を設置した。宣統３年（1911年），県府所在地にも高等小学堂を設置した[40]。

宣統２年（1910年），郭爾羅斯後旗に蒙小学堂を設置して，モンゴル文と漢文で授業して，その後，札薩克府に両等小学堂を付設して，「論語」，「孟子」，漢文を教えて，清朝学部から公布された教科書を使っていた。札賚特旗も宣統３年（1911年），学堂を設置して，モンゴル文と漢文の教育が行われていた[41]。郭爾羅斯後旗よりやや早いが，宣統元年（1909年），郭爾羅斯前旗の旗王斎默特色木丕勒が哈拉毛都屯に学堂を設置して，王府にもモンゴル文学堂と漢文学堂を別々に設置した[42]。光緒33年（1907年），杜爾伯特旗の安達庁が當奈に初等小学堂を設置した。続いて，34年（1908年），多耐，他拉哈，温特河各地にそれぞれ武興初高等小学堂，武南初等学堂，温特河初等小学堂を設置した。これらの学堂は漢族に向いた漢文学校であった[43]。

東北地方に前掲喀喇沁左翼旗，阜新県，郭爾羅斯後旗と前旗，杜爾伯特旗のほか，東北各省もモンゴル教育と言語教育を重視していた。奉天省に同治年間からモンゴル官学が存在していたが，光緒33年（1907年）盛京将軍趙爾巽がその場所を利用して，蒙文学堂を創設した。その上申書を見ると，この学堂はモンゴル各旗の王公と台吉の子弟に向けられたもので，漢文漢語と科学知識を勉強させて，学生たちには漢文とモンゴル文に塾達したものが多いので，将来チベットとサンスクリット典籍を研究させれば，古典も廃れないと主張されている[45]。34年（1908年），学堂が更に拡充されて，蒙文高等学堂になった。学堂に正科，予科の区別があって，正科四年制，予科三年制，それにモンゴル文とチベット文科と別科が付設された。そのほか，光緒31年（1905年），正紅旗満州協領奎明が八旗小学堂を設置して，その後，それが蒙古八旗小学堂，八旗第二公立両等小学堂と改称され，宣統３年（1911年），八旗第一，第三，第四公立高等小学堂と合併して，八旗公立高等学堂と称されるようになった[46]。このような合併が奉天省所属のモンゴル族教育が発展の頂上から低迷状態に向かっていることを表している。

吉林省には乾隆６年（1714年）からモンゴル八旗官学が存在していた。光緒33年（1907年），吉林蒙文学堂が創設され，翌年（1908年），官立満蒙中学堂が設置された。同年，満州モンゴル問題に熟達した人材を養成するため，別に蒙文学堂を設置した。

表１　宣統二年（1910年）吉林省旗務処所属満蒙学堂概況[47]

学堂名称	場　所	クラス数	生徒数	職員数	教習数
蒙文学堂	省城文廟附近	1	４０	3	5
蒙文専門学堂	省城忠王廟附近	1	４０	3	5
満蒙中学堂	省城東萊門里学院街	2	１４７	5	１０
満蒙両等学堂	省城巴爾虎門内	2	８０	2	4
合　　計		6	３０７	１３	２４

表 2　清末満蒙中小学堂言語科目の授業時数[48]

科　目	満蒙中学堂		満蒙高等小学堂	
	甲クラス	乙クラス	甲クラス	乙クラス
満州文	3	4	3	4
モンゴル文	8	7	9	7
国文（漢文）	4	4	6	9
経　学	5	5	5	3

蒙文学堂では，学部の章程により，修身，読経，講経と国文（漢文）を中心に，モンゴル文とその他の科目を兼学して，モンゴル文のほか，すべての科目は漢語で授業がなされた。蒙文専門学堂では，モンゴル文を中心に，漢文を兼学して，官立満蒙中学堂と満蒙高等小学堂では，満州文とモンゴル文を同時に取り上げて，甲乙クラスが満州文，モンゴル文，国文と経学のほか，あらゆる科目が一般の中小学堂と同じであった。

こうした情報を授業時間の多少によって，再び整理すると，表 3 になる。

明らかに，高等小学堂の甲クラスはモンゴル語の基本が弱いものに向いて，乙クラスは漢文と漢語基本が弱いものに向いている。このように工夫した結果，生徒が中学堂に入ると，その区別がただ満州文のレベルのわずかな違いになっている。このカリキュラムに現れているモンゴル語―漢語―満州語といった順序付けはその時の言語教育方針あるいは言語の社会地位をある程度反映しているかもしれない。

黒龍江省が光緒34年（1908年），省府所在地斉斉哈爾（チチハル）に満蒙師範学堂を設置して，西南と西北各地域のモンゴル，達斡爾（ダグール），鄂論晴（オロチョン），鄂温克（エウェーンク）[49]諸民族の子弟を募集していた。師範学堂に小学堂を付設して，満州語，モンゴル語，漢文合璧教科書を使い，応募者はこれらの言語を勉強していたものに限られるとしていた。師範学堂は京師の訳学館を参照して，翻訳を中心に，一般の科目も漢語で授業していた。小学堂は一般初等学堂のカリキュラムを参照して，満州語，漢語翻訳科目を適宜に導入した[50]。

呼倫貝爾（フルンボイル）盟の学堂教育は光緒29年（1903年），中東鉄道局が設置した初等小学堂から始まった。光緒33年（1907年）呼倫貝爾副都統宋小濂が官立両等小学堂を設置した[51]。同年，西布特哈（ブトハ）総管府所在地後宜臥奇に初高等小学校を設置して，宣統年間，尼爾基（ニルジ），大莫丁（ダムディン），烏爾科（ウルハ），霍日里（ホリリ）各地にも初等学堂が次々と設置された[52]。宣統 3 年（1911年），陳巴爾虎（バルグ）副総官訥興格（ナシンガ）が河北小学堂を設置して，満州文，モンゴル文，漢文とそろばんを教えていた[53]。宣統 2 年（1910年），素倫旗（ソロン）の莫和爾図（モホルト）村に新式小学堂が設置され，鄂温克，達斡爾族の子供に満州文，漢文，「三字経」，「聖書」などを教えていた[54]。注意すべきなのは，呼倫貝爾のモンゴル族の子供がモンゴル，満州，漢文を勉強していたが，達斡爾，鄂温克などの少数民族の子供が満州文と漢文を勉強しており，学堂の数もモンゴル族のそれより多かったことである。その時の達斡爾と鄂温克族の教育発展は主に満州文に恵まれていたためだと思われる。

B　京師学堂の設置と言語教育

地方学堂設置よりやや遅れたが，光緒31年（1905年），陸軍貴胄学堂が京師に創設された。この学堂は兵部に所属するもので，満州，モンゴル王公襲爵，四品以上の宗室，現任二品以上の満州，モンゴル，漢人大臣の子弟で，賢いものであれば，入学できると規定している。宣統元年（1909年），内閣学士宝熙の奏請で，貴胄法政学堂を創

表 3　科目授業時数による順序付け

学　堂	クラス別	科目授業時数による順序付け
満蒙高等小学堂	甲クラス	モンゴル文，国文，経学，満州文
	乙クラス	国文，モンゴル文，満州文，経学
満蒙中学堂	甲クラス	モンゴル文，経学，国文，満州文
	乙クラス	モンゴル文，経学，国文＝満州文

設した。入学条件が陸軍貴胄学堂と同じではあるが，「漢文ができるもの」を特に強調している[55]。光緒33年（1907年）公布された外務部の「貴胄遊学章程」にも，英，米，徳諸国に派遣されて，法政学と軍事学を専攻する貴胄留学生は王公の子弟と貴胄優秀者から選べると規定している。法政と軍事は清朝にとって治国平天下の要で，貴胄学堂の設置から清朝政府が新学を利用して，旧制度を守ろうとした苦心の跡が見える。

光緒34年（1908年），清朝政府が満州とモンゴル語に熟達した人材を養成して，民族の美点を守りつつ国のために用いる主旨で，京師に満蒙高等学堂を設置した。法政，測量製図と一般科目のほか，満州語，モンゴル語とチベット語コースを開設して，満州，モンゴルの歴史，地理などの内容を勉強させていた。学堂が正科，予科，別科に分けられて，正科三年制，予科二年制，別科三年制となって，賞罰制度，進学と任用制度，各科教員と監督，教務長，監学官，検査官，雑務管と料理長などの管理職も整っていた。定員は正科と予科およそ120人，別科80人（1908年度）で，主として満州，モンゴル語中学堂出身者から募集されていた[56]。宣統元年（1909年），理藩部がモンゴルとチベット王公を代表して，殖辺学堂を創設するように要請した。殖辺学堂にモンゴル部とチベット部が設けられて，京師内外の満州，モンゴル，漢人の子供から18歳以上32歳以下で，漢文に通じる健康な者を募集して，約3年間勉強させたが，満州語，モンゴル語ができるものであれば，優先的に募集すると規定していた[57]。

C　多言語教科書の使用状況，編集，出版と発行

学堂が設置されるにつれて，教科書の翻訳と編集と出版は日増しに問題となっていた。地方では，学部に指定された漢文教科書をそのままに使うとか，国文と他の科目に学部の教科書を使って，モンゴル語に古い教科書「四書」，「聖諭広訓」を使うとか，要するに教科書の使い方とその内容は非常に混乱していた。図2－5はその時に使われていた教科書のサンプルで，いずれも東京「東洋文庫」に所蔵されている文献からコピーしたものである。

教科書問題の解決に最初の試みたのが，東三省総督錫良と奉天巡撫程徳全及び蒙務局前協領栄徳である[58]。宣統元年7月（1909年），錫良と程徳全が栄徳に学部の審定した初等小学堂教科書から重要な部分を選んで満州，モンゴル文に翻訳して，満蒙漢三文合璧教科書を編集するように命令した。宣統2年2月，前4冊が2万冊，勧

図2　蒙古文範及び聖諭広訓

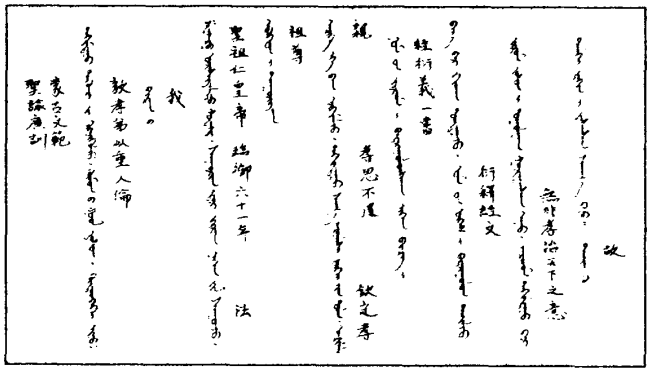


図3　蒙文晰義（1811）

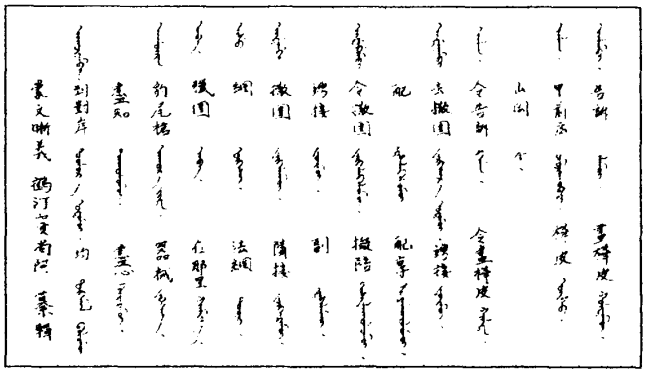


図4　蒙文法程

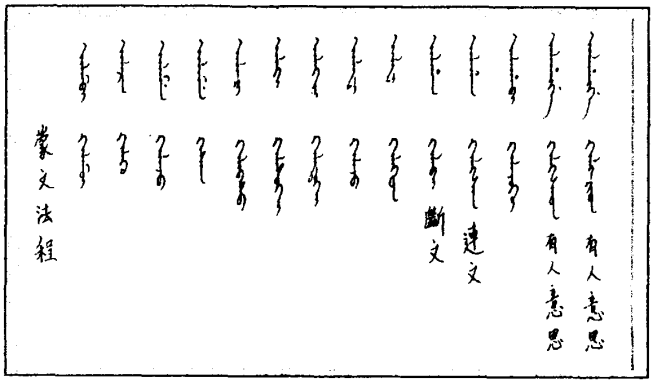


図5　満蒙漢三文合璧教科書（1908）

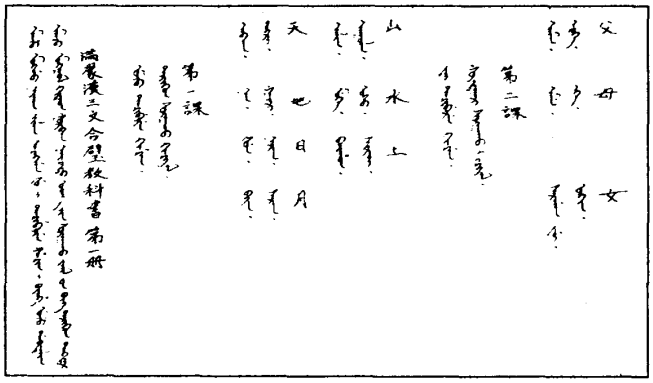


表４　東三省教科書地域別発行数

地方と学堂	毎種教科書数	計	勧学文
前郭爾羅斯１旗	３００	１２００	３００
図謝図と他９旗	２６０	１０４０	２６０
計１０旗		１０５６０	２６４０
奉天蒙文学堂	２００	８００	２００
新設満蒙文中学堂	１５０	６００	１５０
維城小学堂	１５０	６００	１５０
満州小学堂	８０	３２０	８０
蒙古小学堂	４０	１６０	４０
漢軍小学堂	８０	３２０	８０
内 務 府	４０	１６０	４０
計		３１６０	７９０
吉林省満蒙文中学堂	１００	４００	１００
黒龍江満蒙文中学堂	１００	４００	１００
計		８００	２００
総　　計		１４５２０	３６３０

業文が５千冊石印されて，奉天，吉林，黒龍江三省のモンゴル旗に発行された[59]。地域別の発行数は表４のようである。

表４からもわかるように，清朝時代，モンゴル学堂教育における二言語教育あるいは多言語教育の中心は東北にあり，東北地方には郭爾羅斯前旗と図謝図（トシェート）９旗，その次は奉天，吉林と黒龍江のように順序付けられている。しかし，前の研究からもまとめられるように，言語地位から着目すると，東北地方には，個別なところを除いて，京師と同じ，漢語が主な授業言語になって，一方，赤峰市（昭烏達盟と昭斯（ジョスト）図盟）地域ではモンゴル語と漢語が同時に強調されて，帰綏地域では漢語が圧倒的な力を持っていた。赤峰市の北部，呼倫貝爾，興安（ヒンガン）盟，烏藍察布の東部と北部，巴彦諾爾（バヤンノール），阿拉善（アラシャン），伊克昭盟などの広範な地域では学堂教育が空白となって，伝統的なモンゴル語教育が絶対優勢な地位にあった。

D　蒙蔵回地方興学章程の公布とモンゴル学堂システムの規範

1902年から1911年まで，10年間の実践を通じ，清朝政府は，とうとう宣統３年（1911年）「蒙蔵回地方興学章程」を公布した[60]。この章程には以下のようなことが規定されている。

１．学堂システムと教員養成

蒙蔵回学堂システムは初級師範学堂，高等小学堂，初等小学堂三種類の学堂からなる。師範学堂は更に二年制簡易科と四年制完全科に分けられ，前者は初等小学堂教員を養成する機関で，後者は両等小学堂教員を養成する機関である。初等と高等小学堂はいずれも四年制とする。

２．行政と経費

学務弁事処に学務官職を設けて，業務に熟達した，モンゴル語またはチベット語ができるものから任用する。モンゴル地方の教育費は将軍，大臣，盟長の督促で各旗から調達する。

３．言語教育モデル，教育目標

雑居地域あるいは漢語が通用された地域では普通の学堂章程を適用して，そうでない地域では本章程を適用する。言語教育の目標は生徒が高等小学堂を卒業するとき，直接に漢語で授業を受けられるようになることである。

４．言語教育の実行とプロセス

初等小学堂一年と二年は，それぞれモンゴル語，チベット語，回語で授業して，週授業時間は16時間とする。三，四年から漢語漢文を参用するが，その割合は三年生の場合3.2時間，四年生の場合，その倍になる。高等

小学堂一年生と二年生の週言語教育時間はいずれも14時間であるが，漢語漢文の授業時間が急に増えて，一年生の場合７時間，二年生の場合9.8時間になっている。三年生と四年生の週言語教育時間はいずれも12時間で，漢語漢文教育時間が三年生の場合9.6時間，四年生の場合11.8時間になって，モンゴル語とモンゴル文授業は止められる状態になっている。簡易師範科では毎週のモンゴル，チベット，回語の授業時間はそれぞれ20時間，完全科では一，二年の週授業時間は16時間，三，四年のそれは12時間とする。漢語，漢文の占めるべき割合を明示していないが，総言語教育時間に含まれていると思われる。

５．その他の科目

初等小学堂のカリキュラムには言語科目のほか，修身，算術，体操などがある。高等小学堂のそれに歴史，地理，格致三科目が加えられている。師範学堂では簡易科の場合，言語科目，算術，教授法，管理法と体操があって，完全科の場合，一，二年に言語科目，算術，格致，歴史，地理，体操を勉強させて，三，四年に教授法，管理法が加えられている。

残念ながら，清朝の崩壊により，この章で述べたことは無に帰することとなったが，前の実践をまとめて後の事業を導く重要な資料として，今なお研究上の価値があると思われる。

E　学堂教育とその言語教育の特徴

清朝末期のモンゴル族学堂教育と言語教育には以下のような特徴が見える。

１．学堂教育の承継性

学堂教育とその前の官学には，継承性がある。この継承性が教育の目的（清朝を滅亡から救う），教育内容（伝統的な儒教経典と言語，軍事教育），教育対象（教育は主に貴族子弟に向いている），教育施設（学堂の一部は官学，私塾，書院から変化してきた）などによく現れている。

２．学堂教育の開拓性

学堂教育は新しい教育思想の結果であり，国家の前途と民族の将来を担っていた。教育によって腐敗堕落を極めて滅亡しようとしている封建王朝を救うのは無駄骨ではあるが，国家の政治生活と国民一般の中で，教育の地位をかつてないほど高めたことは評価すべきであろう。国家教育制度の進歩からいえば，学堂教育の実行で，学校教育が封建科挙試験の束縛から解放されて，比較的独立したシステムになった。教育対象からいえば，国家教育が初めて貴族教育から平民教育へ進む重要な一歩を歩き出した。喀喇沁左翼旗郡王貢桑諾爾布が設置した学堂では，生徒の家柄，性別と出自を問わず，体格と年齢条件が合うだけで入学させるようになっている。毓正女学堂はモンゴル族近代女子教育の先導でもある。教育内容からいうと，伝統的な単純な言語，軍事教育から科学技術教育，体育，美術教育などを含めた総合的，多学科教育へ移行した。

３．閉鎖的な伝統教育の突破と開放的な近代教育の唱え

清朝末期のモンゴル族学堂教育はまず興安嶺の東部，陰山山脈の南部，黄河流域の農業地域または牧畜，農業兼業地域から始まったのである。このような地域では，漢族移民の殺到にともなって，異なった教育観念（読書して官になる）が導入され，新しい教育需要が社会的に提出され（農業社会の発達から生まれた管理と技術への需要），教育条件（村になった集団生活）も次第に備えて来た。清朝前期，政府はモンゴル族と漢族の往来を固く禁じていたが，清朝の政治的支配力の衰勢と漢族の東北への移民にしたがって，漢族の影響はますます強くなった。モンゴル地方で蒙漢学堂が現れたばかりでなく，モンゴル学堂では漢語，漢文教育が重視され，学生を内地に派遣して勉強させることもあった。学堂の漢語文教員は漢語漢文に熟達したモンゴル族教員のほか，特に内地から招聘された漢族教員も多かった。同時に清朝政府はモンゴル族の学生が天津，上海，保定などの工場に入って勉強実習することを許すようになった[61]。漢族との接触と内地見学のほか，外国へ留学生を派遣したことも教育の開放性を一層促進した。モンゴル郡王貢桑諾爾布，新疆土爾扈特（トルゴド）モンゴルの郡主巴塔（バタ）などは日本を訪問して，教育の重要性を初めて認識したのである。貢桑諾爾布が設置した崇正学堂，毓正女子学堂と崇正武備学堂は教育思想，教育内容，課程設計，学校施設あらゆる面でその時の日本からの影響を受けていたことは明らかである。女子教員河原操子，教官伊藤柳太郎，吉田四郎も日本人で，日本語が初めてモンゴル族の学校教育に入った。

４．学校教育システムの形成

教育の種類と等級別が多様化されて，一般教育，留学生教育と内地見学が現れた。一般教育が満蒙高等学堂，陸軍貴胄学堂，法政学堂，蒙古学斎，殖辺学堂のような中央部門に所属する（陸軍貴胄学堂は兵部に，蒙古学斎と殖辺学堂は理藩部に属する）高等教育機関と，大都市に設置されていた満蒙師範学堂（斎斎哈爾）と，承徳府蒙漢文師範学堂のような初中等師範学堂と，地方に設置されたいろいろな高等，初等小学堂と中学堂のような基礎教育機関に分かれていたのである。高等教育機関に文

科系のものと軍事，法政のような専門学校の性格を持ったものがあって，学堂内部に，正科，予科，別科を区別するようになった。満蒙師範学堂に小学堂クラス（初等小学堂四年）が付設されて，帰綏中学堂と官立両等小学堂には初級師範クラスが付設されていた。小学堂には，両等小学堂と小学堂，高等小学堂を別々に設立する方法があった。前者は今の完全小学校にあたるものである。

5．言語教育と授業言語の変化

清朝前期，モンゴル族と満州族は文化的により緊密な関係を持っていたので多くの教育機関が満蒙連合の形をとって，満州語とモンゴル語は必修の言語科目であって，学堂の授業言語でもあった。清朝末期，満州族の政治的文化的支配力が弱まっていくに従って，満州語も重要性を失うようになった。代わりに，漢語の影響はますます強くなって，学堂教育では，部分的に満州語ないしモンゴル語に取って代わるようになったのである。外国との接触を通じて，英語，日本語，ロシア語が学校教育に導入された。守正武備学堂の軍事教育は完全に日本語で行われていた。英文に基づいて，簡易なローマ字を作って，文盲を無くそうとした試みも現れたのである。

F　言語教育モデル，転換方向とプロセス及び社会的諸要因との関係

1．言語教育モデル

その時の言語教育モデルとその発展プロセスまたは原因を略図でまとめると以下のようなものになる。

a　満州語－モンゴル語－チベット語三語モデル

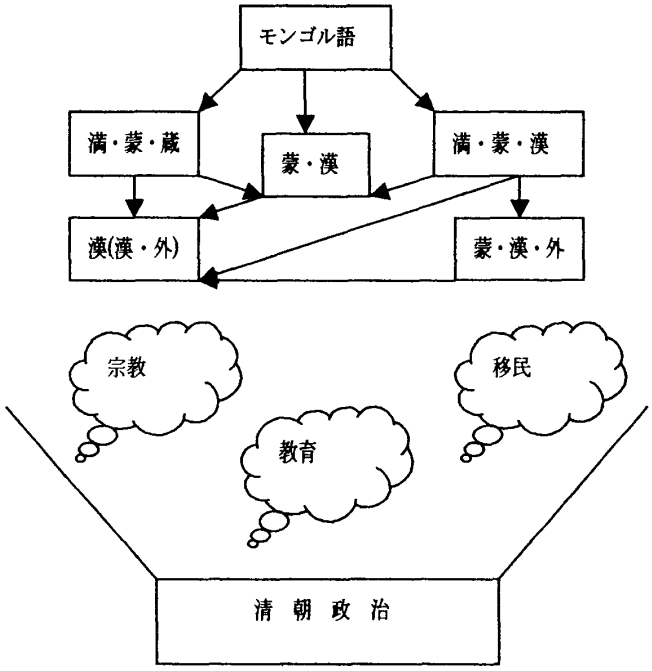
満蒙高等学堂では正科が満州，モンゴル，チベット三科に分けられて，三つの言語が主課になっていた。殖辺学堂にはモンゴル，衛蔵二科があった。奉天省の蒙文高等学堂（1908年）にモンゴル文とチベット文科（これらの学堂はチベット地域から遠く離れたところに設置されたので，生徒の多くは満州，モンゴル人であった）が付設されていた。

b　満州語－モンゴル語－漢語三語教育モデル

これは広い地域で行われた一般的な形だが，時代や地方によって言語の順序付けは異なる。陸軍貴胄学堂と法政貴胄学堂応募者にとって，家柄のほか，漢語を勉強していたかどうかが一つの条件となっていた。1911年の科爾沁右翼前旗学堂，1908年の黒龍江満蒙師範学堂，1886年の土默特啓運書院などで満州，モンゴル，漢語がともに勉強されていた。1904年の綏遠満蒙学堂では一斎が満州語，二，三斎がモンゴル語，四斎が漢語というように分科言語教育が行われていた。

c　モンゴル語－漢語二言語教育モデル

図7　言語教育モデル



漢族接近地域または雑居地域での一般形である。中に，モンゴル語と漢語を同時に勉強するものと，1902年の科爾沁左翼前旗学堂のような主に漢語を勉強して，それにモンゴル語コースを加えるものと，黒龍江満蒙師範学堂のように前期課程では民族語基礎と翻訳を勉強して，後期課程では漢語教育を強めて，漢語でいろいろな内容を勉強するといったいくつかの形があった。前記からわかるように，1911年の蒙蔵回地方興学章程では黒龍江満蒙師範学堂の形が主流になったわけである。

d　モンゴル語－漢語－外国語三言語教育モデル

1879年の啓秀書院から発展してきた綏遠中学堂が満州，モンゴル，漢語，外国語という四科に分けられていたが，1906年，モンゴル語と満州語科が満蒙学堂に合併されて，漢語と外国語科の優秀な学生40人から中学堂甲クラスができて，経学，国語，算学，英語，博物，歴史，地理，体操などのコースを勉強していた。1902年の崇正学堂，毓正女学堂と守正武備学堂ではモンゴル語，漢語，日本語教育が積極的に行われていた。その時から，満州語は名前だけ残って，実際のところ，学校教育から姿が消えるようになったのである。

e　漢語モノリンガル教育モデル

1902年の帰綏中学堂，土默特，包頭などの雑居地域の学堂，青海蒙古半日学堂などでは，漢語だけで教育を受けていたモンゴル族の学生も多かったという。

f　モンゴル語モノリンガル教育モデル

学堂教育の力が及ばなかった広範な牧畜業地域ではや

はりモンゴル語一言語教育の世界であった。このような教育を支えていたのは民間と旗府の私塾教育あるいは家庭教育であった。

2．モデル転換とその傾向性

言語教育のモデル転換方向とプロセスからわかるように，これらのモデルは清朝時代ともに存在していて，その転換プロセスは決して線形序列になるわけではなかった。しかしこれらのモデルは分化，再配置によって，漢語とモンゴル語両端的モノリンガルモデルと，モンゴル語と漢語バイリンガルモデルに集中する傾向が既に現れていた。これは清朝のモンゴルに対する同化的政策とモンゴルの伝統文化が衝突して，妥協した結果である。

3．モンゴルに対する同化的政策と教育政策

清朝のモンゴルに対する同化的政策は行政的分割のほか，宗教，移民，教育三つの政治的手段に分けられる。本文の第四節に具体的に分析するが，清朝はチベット系のラマ教を利用して，モンゴル族を精神的に麻痺して，人口的に減らして，経済的に貧困化させることを目指した。この政治的要素の言語教育にもたらした結果はチベット語の導入である。敗戦と蜂起に困った清朝政府は苦境を救うため，モンゴル地域に大量の災民を移住させた。これは政治的にモンゴルを弱めて，漢民の騒ぎを静める目的で，経済的に漢民に生計を与えて，国庫を充実させる妙策である。ただこのような政策の実施によって，モンゴル人は生活手段になっていた幅広い牧場を失って，文化的に同化されるようになった。教育にもたらした結果は漢文化，漢語の普及とモンゴル文化，モンゴル語の衰退である。

清朝の同化的教育政策とはいったい何だろうか。ここで直接に説明するより，当時の人物姚錫光の高論をまるごとに引用したほうが近道だと思われる。なぜならば，この姚錫光は清末の抜貢，宣統3年の奕劻弼德院顧問，民国のとき錫威将軍，蒙蔵事務局の総裁，口北宣撫使，参政院参政などの重職に在任していたので，彼の意見は一定の代表的な意味があるばかりでなく，その理論の研究が，民国と後世のモンゴルに対する教育と言語政策を理解するにも役に立つからである。

籌蒙芻議

漠南の内モンゴルにおける開墾された旗分がおよそ内モンゴル全地域の十分の七を占めた。モンゴル教育はこれを立脚の基礎とし，普及を図るべきだとされた。

教育宗旨：教育宗旨の在り方は国家の利害方向によって変わる。これは世界万国古今を通じて一定不易の公理である。誰でもある教育を受ければ，自身に有利であるか，それとも却って不利であるかがわかる。もし後者であれば，国家の利害関係に違反して，教育の宗旨を背いたことになる。モンゴル部族は，もともと世界最強の部族であったが，わが国の列聖が相継いで，宣撫懐柔した結果，北方境界が安定して今に至ったのである。これはまったく聖人のおかげである。モンゴル部落は今分割され，人口的にも少なくなったが，各旗の札薩克が依然として隠然たる郡国子民の資格を持っているので，彼らはわれわれの代わりに自己部民を教育するか，それともわが国のため，国民を養成して，共に賦課して，共に干戈を持って，お互いに区別なく渾一になるか，これは今日教育を起こすとき必ず問うべき一つの重大な問題である。論者はしばしばモンゴルを愚劣病弱であり，教育は愚劣病弱なものを賢明強健なものにならせると言う。問題になっているのは彼らが賢明強健になった後，実力に訴えて，わが国を制限するかどうか，あるいは災禍の火種を増やすかどうかということである。こうした二つの大きな問題があって，しかも，利害につながるから心配が起こる。心配が多くなって苦心されるところに教育の宗旨が生じる。

今日，モンゴル教育の方策には，蒙漢同化しかない。これは国家に有利であり，モンゴルに有利無害であり，漢民にも有利である。蒙漢同化の教育が決まったら，教育の宗旨も決められたわけである。蒙漢が同化して，手をつないで，共に国民となって，外国の圧力に抵抗する。たとえその中に，非常な策謀を心に潜めた人物が何人いても，連携があって，お互いに牽制すれば，力が自ずと衰えて，却って国家に利用されるようになる。したがって，国家に有利無害なわけである。モンゴルの脆弱性は彼らが自営生計など知らないからである。いまや，蒙漢同化の力があれば，漢民の耕作，手芸，商売などの生計は皆蒙民に利用される資財となる。喀喇沁など蒙漢雑居各旗を見ると，巴林などの未開放各旗より，蒙民の衣食住は遥かに余裕になっている。況して，同等の教育を受けたら，蒙民の生業は更に発達すると想像される。したがってモンゴルに有利無害なわけである。光緒16－7年の間，熱河境内に起こった金丹団匪の反乱は，実は蒙漢積怨に起因したもので，お互いに今でも静まらない根深い宿怨になっており，いつでも再び爆発する可能性がある。しかしもし同化の力があれば，主客両方の恨みもおのずと解かされる。したがって，漢民にも有利無害なわけである。去年と今春，私は二度にわたって辺境に向かって，モンゴル地域を調査したが，州と県のモンゴル王府が各自の学堂を設置して（モンゴル王府には喀喇沁だけが蒙小学堂，武備学堂，女学堂それぞれ一箇所設置した），州県の学堂には蒙民子弟がいなかったし，モンゴル学堂にも漢民子弟がいなかった。同化の希望どころか，州県が専ら（教育の）名を借りて，課税の実を隠すばかりで，本当に教育を熱心にしているものでは

なかった。その腐敗状況は言うに足りない。モンゴル学堂では，練兵に熱中しており，授業の印象と，休日の講演について聞くと，まるで成吉思汗の事業を取り戻すことで三百万同胞を激励しているようであったという。わが国の聖武神功など聞くにも聞けなかった。ここから彼らの意図が充分窺われる。況して，下心を持つ外国教習が虚に乗じてやってくることなど言うに及ばない。もし専管を設けて，全部を一手に管理させなければ，学堂が増えるにつれ，トラブルも計りきれないほど多くなる[62]。

これは立派な同化主義の宣言である。光緒32年八月（1906年）に公布されたこの宣言は，清朝末期の学堂教育と言語教育方針を強く影響したことは学堂教育の漢語を強調する傾向ないし教育の局限，失敗と蒙蔵回地方興学章程からよく窺われる。

しかし，宗教も，移民も，教育も，姚錫光の妙策も清朝を滅亡の運命から救うことはできなかった。皮肉にも，清朝を覆したのは姚錫光の心配していた，ただ自分の言語と文化の繁栄しか図らなかったモンゴル族ではなく，ちょうど姚錫光の出身民族とその国民革命であった。清朝の運命のためあれほど苦心していた姚錫光も，一変して国民政府の蒙蔵事務局の総裁になり，清朝時代十分展開されられなかった同化主義政策を国民革命の名で徹底的に実施する機会を得た。国民革命が皇帝を打倒したが，その封建主義の民族政策と言語政策をそのまま受け入れて，更に推し進めた。姚錫光に遠まわしに非難されていた貢桑諾爾布も中央に移動して，彼の創設した教育事業も途絶えた。ここに至って，外モンゴルが独立の道を辿って，その教育も言語も独立した国民教育と国語の資格を得た。内モンゴルは民国にいくつかの省に分割され，その教育と言語教育が独特の艱苦な環境で進んでいた。モンゴル国の言語教育と民国における内モンゴルのモンゴル族言語教育について，別々の論文で扱うことにした。

3．地方教育と言語教育

A　義学と言語教育

義学というのは，工商業組織「公行」，あるいは地方官吏，紳士などがお金を出して設置した無料教育機構である。嘉慶８年（1803年），帰綏道長白徳公綸が古豊義学を作った[63]。続いて，包頭には四大義学が設置されて，毎学教職１人，四学で合計100人あまりの生徒が勉強していたという[64]。このほか，乾隆年間に設置された清水河義学，雍正年間に設置された豊鎮庁義学などが存在していた。光緒年間，杜爾伯特旗の駅站が私学館を設置して站丁と商号の子弟を募集していたという[65]。義学は漢族向けの学校だったので，モンゴル語教育は行われていなかったかあるいは非常に少なかったと思われる。義学の教育内容は「四書五経」のほかはない。

B　書院，書房と言語教育

清代の書院について，嶋田道彌は「一種の学問奨励の機関として存在するに過ぎない」「日課を定めて授業することは至って少なかった」と指摘している。書院の多くは地方官または紳商の捐金によって創設され，地方紳士の経営に属し，府県州長官の監督を受けることになっている[66]。書房について，同氏は「この地方における唯一の初等教育機関であった。書房には専館散館の２種があったが，是等の書房は元来永績的なものではなく，毎年陰暦２月より10月に至る９ヶ月間開かれ，10月に至れば之を閉鎖した。」とその制度を詳しく説明している。

光緒12年（1886年），帰綏道安祥が古豊書院を創設した。これは漢学であって，毎月当地の廩，増，附生及び文童を集めて四回授業する。１，15日は大課で，帰綏道（一日）と帰化庁から試題を出して試験を行う。６日，21日は小課であって，院長から試題を出して試験する[67]。

光緒13年（1887年），綏遠城将軍克蒙額（カモンガ）が啓秀書院を設置した。これは旗学であって，八旗から派遣された官員によって管理されて，帰化城のモンゴル人，漢人，誰でも受験することができる[68]。

啓運書院は土默特官学から発展してきた，蒙学に属するもので，満州文，モンゴル文とアーチェリーを強調した。そのほか，聖諭広訓十六条も必修科目になる。レベルが高くなると，満州，漢，モンゴル合璧の四書を勉強した。ただ同治，光緒以来，モンゴル人には漢文を勉強する者が多くなって，漢族出身の子供と一緒に受験するようになった。以前，部に呈する公文書には満州文しか使われていなかったが，今，部に呈する公文書だけに満州文を使って，モンゴル札薩克への書類はモンゴル文を，各道庁への公文書は漢文を使うようになった[69]。

前述によると，書院には漢学（古豊書院），旗学（啓秀書院），蒙学（啓運書院）といった三種類があって，漢学は主に漢族に向いているに対して，旗学は漢族と満州，モンゴルすべてを対象にし，漢語で授業していた。一方，蒙学は満州語，モンゴル語を中心とした学校だったが，漢語の影響が強くなって，漢語を重視して，漢語を専攻する人が多くなったのである。このことは公文書用語が純粋のモンゴル語から多言語への使い分けといった移り変わりにも反映している。

順治5年（1648年），巴林左旗札薩克，順治6年（1649年），巴林右旗札薩克，順治7年（1650年），晋多羅郡王などが次々と旗府所在地に「筆帖式書房」を設置した。康熙7年（1668年），喀喇沁右翼札薩克が王府に書房を設置して，貴族の子供たちにモンゴル文，チベット文，満州文，漢文，礼儀，計算，書道，詩詞教育を実施していた。同治9年（1870年），阿魯科爾沁旗に王府書房，光緒23年（1897年），同旗に協領府書房が建てられた。光緒年間，喀喇沁右翼札薩克が王府に創設した「如許書房」には数多くの貴重な書籍が所蔵されていたという。光緒33年（1907年），翁牛特左翼旗貝勒が貝勒府書房を作って，11人の生徒を募集していた。光緒34年（1908年），敖漢旗王府協理が専館を作って，自家子弟のほか，隣の裕福な世帯の子供も募集していた。清朝中期以降，巴林右旗には多くの「村書房」が設置されていた。その中にもっとも有名なのは「潔白書房」で，数多くのモンゴル文書籍が所蔵されていたという。注目されるのは，モンゴル王公の交替に世襲制が実施されていたので，書院と書房教育が貴族，官吏教育に重要な役割を果たしていたということである[70]。

「喀喇沁左翼蒙古族自治県誌」によると，乾隆38年（1773年），塔子溝庁理事通判であった哈達清格が凌源街に秀塔書院を創設した。道光10年（1830年），建昌県令がそれを廃して，変わりに瑞雲書院を設置した。庁というのは，清朝の設けた官民を管理する行政機関なので，瑞雲書院などは漢民に向けられて，漢語で教育を起こしていたと思われる[71]。

C　私塾教育と言語教育

1．私塾の種類と性格

私塾は民間教育形式として，漢族地域から伝えられたもので，まずモンゴルの農業地域に現れたのである。モンゴル地方の私塾の教育内容はまず「百家姓」，「千字文」，「三字経」などの啓蒙的なものから始まって，更に四書五経へ進むといった儒学に属するもので，ただ，教科書には全部漢文で書いたものとモンゴル文，漢文の合璧したものとの区別がある。私塾の形は，師生関係によって異なる。金持ちと王公官吏は自宅に先生を招聘して，子供たちを教育をする。この形はモンゴル王公貴族に広く採択されて，官吏教育の特徴をもっていることから言えば，上述の書房教育に近づいている。実は書房の専館というのは一種の私塾に過ぎない。農業文化の導入や村生活の発達によって，いくつかの世帯が連携して先生を招聘して教育を行うようになった。塾師の謝礼は各世帯が分担する。このような形は後世の学校教育，特に簡易学校教育（一師一校）とよく似ている。民衆教育の普及に役に立ったのはこの種類の私塾であって，学堂や学校に改造されたものも少なくない。私塾のもう一つの形式は，子供が先生の家あるいは隣に寄宿して，働きながら勉強する。これは一種の丁稚小僧式教育で，学費が免除されるほか，労働技能を身につけられるのが利点である。

2．私塾の設置

「巴彦諾爾盟誌」によると，巴彦諾爾地域では，清末から私塾教育が始まったという[72]。宣統3年（1911年），二等台吉官其格が白彦花地方で生徒を募集して，モンゴル文と漢文のほか，実用文と公文書の知識も教えていた。生徒20人あまりに，貴族の子弟も，平民の子弟もいたという[73]。巴彦諾爾盟の漢族私塾は主に五原，臨河，磴口に集中していた。民国年間の「辺疆教育」によると，その時の綏遠には1020あまりの私塾があって，17529人の生徒が私塾に通っていたという。千人以上の塾生を持っていた県には帰綏県（1723人），武川県（3120人），薩拉斎県（5880人），豊鎮県（1211人）などが挙げられる。民国は何度も私塾を取り締まるように厳命したが，無駄になって，強く生命力を持っていた私塾が公立学校と両立する状況にあったので，地方政府も仕方なく塾師訓練，教科書などを提供する方法で私塾を公立，私立学校に改造するようになった。公立学校は都市に集中して，農村の子供たちは通えない。また，私塾の先生は公立学校の先生より厳しく，教育内容にも一定の実用性があった。こうした点が私塾が人気を呼んでいた原因であろう[74]。このような私塾で勉強していたのは漢族の子供だけでなく，モンゴル族の子供たちも私塾で漢語教育を受けていたと考えられる。もともと漢族私塾とモンゴル私塾の区別とは言語だけで，授業内容はまったく同じなので，その教科書をモンゴル語で翻訳するか，モンゴル語で説明すると，簡単にモンゴル私塾になってしまうので，モンゴル地域の私塾教育の発展も促進された。モンゴル族の私塾はまず農業地域に現れて，その後半農半牧畜業地域に入って，だいたい清末民初牧畜業地域に伝えられた。このプロセスにもっとも問題になっていたのは多言語教科書と教員の不足であった。

清末，昭烏達盟（今の赤峰市）地域には塾館147処，塾師は160人あまりいたという。そのなか，喀喇沁中旗と右翼旗のモンゴル私塾では，モンゴル文伝統教科書のほか，モンゴル語で翻訳した「三字経」，「千字文」，「名賢集」を勉強して，モンゴル書道も練習していた[75]。民国の始め頃，私塾を改造して学校にするため，赤峰県で単級師範講習所を作って，塾師と塾生を募集していた。学生

たちは1年間，算術，国文，地理，歴史，体操，音楽，図画などの科目を勉強して，卒業後，各地の初級学校の教員とか校長になる[76]。民国20年後，この地域の私塾は406所，塾師は467人，塾生は8100人に達した[77]。

開墾する前，科爾沁右翼後旗には10箇所あまりの私塾があって，モンゴル文の「三字経」，「千字文」，四書などを教えていた。草原を開墾すると，放牧に不便になったので，牧畜民は北へ引っ越して，札薩克府も北山に転居したので，私塾も解散した[78]。光緒7年（1881年），札薩克旗におよそ100人の生徒が10箇所の私塾でモンゴル文を勉強していた。生徒たちはモンゴルパオのオンドルの上に座って，モンゴル字母，モンゴル文，満州文，漢文合璧の「三字経」，四書などを勉強する。3－4人がグループになって，1つの机を使う。練習などに使われる紙とか，鉛筆などの文房具はない。先生が謄写木板に清書したものを生徒達が読んだり，鍋墨油で塗った木板に竹筆で書いたりする。漢字はだいたい読めるが，漢語でその意味をちゃんと説明することは全くできない。日入りになると郡王が年長の生徒と一緒に森に入って，アーチェリーの練習をして楽しむ。モンゴル人の村々に皆私塾があって，モンゴル文を教えていたが，王府の公塾が人気を呼んだので，5箇所の私塾が解散されて，生徒たちが王府公塾に転校した。これまでこの旗には漢語が話せる，漢文が読める人はいなかった[79]。科爾沁右翼中旗の私塾教育の規模，内容と方法は右翼前旗と同じレベルにあって，旗民には漢語に通じるものはまれであった[80]。

宣統2年まで，札賚特旗には学堂ばかりか，モンゴル民衆が漢語を勉強したり，漢書を読んだりすることは厳禁されていた。隣の旗から来た漢語で話すモンゴル人をばけものとし，当地のモンゴル人集居地に入ることは拒否されていた。教育を起こさない原因を聞くと（調査している人にとって，モンゴル語で行われているのが教育とはいえないということ），全旗のモンゴル人が漢語等わからない，学堂を創設するには，何よりもまずモンゴル文を教えて，兼ねて漢文を勉強させて，その後，漢文を読むとか，学堂を設置するとか，初めて可能になるという。黒龍江省提学使がこの旗に学堂を設置するため，教員を派遣したが，王府塾に勉強していた生徒たちは皆驚き恐れて，蜘蛛の子を散らしたように家に逃げ帰ってしまったという[81]。実はここで問題になっているのは，清朝の官吏が教育と漢語教育を同一視して，モンゴル人の誤解をもたらしたことと，地方の民族文化，言語条件と自由意志を無視して，漢族の教育モデルをモンゴル人に押し付けたことだと考えられる。宣統2年から，札賚特旗の札薩克府と3箇所の租局で，モンゴル語と漢語の二言語教育が行われるようになった[82]。

清朝時代のモンゴル族教育上，意味深い事蹟として，東北三省総督錫良の「諭哲里木盟十旗興学勧業文」[83]が挙げられる。この文に喀喇沁王の興学と貴胄法政学堂を事例とし，モンゴル地方で教育事業を起こす可能性と政府の教育の重視を強調した。続いて錫良は分析を加え，貴胄学堂はとてもすばらしいが，ただ貴族子弟を養成するだけで教育は平民に及ばず，一方で奉天蒙文学堂がモンゴル人子弟に向いているが，地理的関係で全地域の生徒たちに利用されない点から，教育を起こす正しい方法はやはり当地で自ら学校を創設することだと指摘した。彼はこれまでモンゴル地方で教育を発展させるのに一番難しいのが，教科書や漢語・モンゴル語に熟達した教員が足りないことであったとして，しかし今や教科書問題の解決は見込みがあるようになったので各地では公立小学校，ラマ廟小学校，私塾を速やかに創設すべきであると要求した。地方教育の重要性を強調して，民衆教育，教科書と教員養成を重視して，公立，私立，廟立学校を同時に発展させることを唱えたのは錫良の貴重な貢献だと思う。その時，哲里木全地域では，科爾沁左翼後旗，庫倫旗のいくつかの学堂を除いて，私塾教育は圧倒的な地位にあったと言える。村ごとに私塾が設置されて，私塾の改良は問題になっていたのである[84]。漢語漢文を私塾または学校教育に導入した時間が一番早いのは科爾沁左翼後旗，その次は左翼前旗と庫倫旗で，左翼中旗のモンゴル人生徒およそ200人あまりが，旗を離れて，他の旗でモンゴル文教育を受けていた[85]。奈曼（ナイマン）旗，札魯特（ジャルード）旗と左翼中旗でモンゴル私塾が発達したのは民国建国以降のことである。民国前期，哲里木盟の私塾教育が学校教育に適う実力を持っていたことは以下の表5からもうかがわれる[86]。

清朝の中葉から，喀喇沁左旗では私塾教育が行われてきた。咸豊（カンホウ）3年（1853年）まで，モンゴル人が漢塾に入って，漢文を勉強することと漢名をつけることは政府に禁止されていたが，清末になると全旗には（今の建昌建を含めて）200あまりの私塾があったという[87]。阜新県，即ちその時の土默特左旗では，貴族教育機構として書房，モンゴル語教育をする機関として寺院が活躍していたが，私塾教育を起こした事例も少なくない[88]。科挙試験に落第した人々は旗府筆帖式（書記官）になるほか，私塾の先生になるのが主な進路であった。当旗ばかりでなく，旗を離れたほかのモンゴル地域で私塾教育，学校教育を導入した人々の中では，阜新と喀喇沁出身の者が一番多い。嘉慶（カケイ）年間，「父授子承」の教育を杜爾伯特モンゴル地域に導入したのもこの土默特人であった。こ

表5　民国前期塾師と小学校教員数比較

旗県別	私塾				小学校			
	私塾数		塾師数		小学校数		教員数	
	蒙	漢	蒙	漢	蒙	漢	蒙	漢
通遼県		52		52		63		119
開魯県								
科左中旗	1		1		3		13	
科左後旗		64		64		2		14
札魯特旗	4	3	4	3	1	1	1	10
庫倫旗	7	9	7	10	3	1	8	5
奈曼旗	5	17	5	17		18		18

の前に杜爾伯特モンゴルのモンゴル語教育は寺で行われて，漢文教育は駅站の私塾で行われていたが，嘉慶年以降，モンゴル私塾も貴族と平民の間で普及して，光緒年間，モンゴル人の子弟も駅站の私塾（私学館）に通って，漢文を勉強することがあった[89]。

「呼倫貝爾盟民族誌」によると，1732年—1734年の間，索倫部落と新巴爾虎部落が呼倫貝爾地域に駐屯してから，モンゴル人の間では，家族教育を中心とした教育が行われていた。厄魯特モンゴルの集居地伊敏（イミン）で行われていたモンゴル語教育は呼倫貝爾盟の最初のモンゴル語教育という[90]。「呼倫貝爾概要」にはモンゴル人の学校教育が光緒初年から始まって，私塾時代，官学時代，新学制時代，新学制中止時代，新学制復昌時代と言った五つの時代を経て，光緒3年，達斡爾部落が南屯に私塾を作って，斎斎哈爾から先生を招聘して，部落の子弟10人あまりの生徒たちに漢語，満州語を教えたのが，モンゴル人が漢語を勉強した最初であると書かれている[91]。「鄂温克族自治旗誌」を調べてみると，驍騎校敖拉昌興（オラチャンシン）が1832年—1851年の間，戈辛達（ガシンダ）に就職中，弟に任せて，自宅を利用して，春と夏，本屯の10人あまりの子供に集中的に文化知識を勉強させていた。光緒3年（1877年），斎斎哈爾から先生を招聘して，南屯に季節的私塾を創設したと書いてある[92]。明らかに，これは前後2回の異なった事柄で，もし私塾を学校としたら，それがずっと早い1832年—1851年間から始まったわけである。その時の人口民族構成から分析すると，鄂温克人3028人，達斡爾人716人，厄魯特モンゴル人651人で，この割合は1923年まであまり変わらなかった[93]ということから，私塾の言語教育の重点は満州文とモンゴル文であって漢文ではないと考えられる。いずれにせよ，清末までの呼倫貝爾地域のモンゴル族私塾と家族教育の中心はモンゴル語，満州語教育と言ってもだいたい問題がないと思われる。

錫林郭勒（シリーンゴル）盟の多倫諾爾（ドローンノール）県を除けた地域，烏藍察布盟のもと綏遠省に属していた南部の豊鎮，集寧などの農業地域を除けた部分，巴彦諾爾盟の個別地方を除けた地方と伊克昭盟の大部分はだいたい呼倫貝爾盟と同じ程度で，私塾教育があまり普及していなかったし，教育の主な形は旗府の官吏教育，寺院の宗教教育と家族教育であって，モンゴル語を主とし，時々満州語を中心としていた。

3．私塾の分布とその条件

私塾は農業文化の産物である。その基本的な条件はより発展した農業生産とそれに基づいたより複雑な社会の仕組み，道徳習慣と技能知識要求，より安定した集中的な住居環境と発達した文字文化（文字教育の発達，印刷と教科書編集及びそれを支える経済と技術）と合格した教員である。私塾教育と教育産出の進路とした封建官吏選抜システムの間には切り離せない関係があったが，そのシステムが崩壊した後，新しい選抜システムの教育基礎として，私塾も一時的に存在していた。農業文化がモンゴル地方へ伝えられるにしたがって，私塾教育もモンゴル地域に導入された。牧畜業文化から農業文化に転換した綏遠の土默特モンゴルとその周辺地域，喀喇沁モンゴル地域では，私塾は成功したが，科爾沁モンゴル，昭烏達盟の喀喇沁以外のモンゴル地域と東北の阜新土默特と杜爾伯特などの半農半牧畜業地域では反抗を受けながら浸透するようになった。呼倫貝爾盟，錫林郭勒盟の多倫諾爾以外の地域，察哈爾八旗と巴彦諾爾盟の北部，阿拉善，伊克昭盟の部分地域では旗府を除いた民間ではあまり受け入れられなかった。人口が少ない，遊牧による

移動的な生活，簡単な社会仕組みと素朴な文化習慣，言語文字と旗府，寺院を中心とした伝統的な教育機関の存在などに原因を求めるべきである。儒学の経典をモンゴル語で表すのが大変な仕事で，モンゴル語で翻訳したとしても，その複雑な教説と価値観は普通のモンゴル人にとって，わかりにくい存在である。官吏選抜制度として，世襲制度の存在と，科挙制度より競争が遥かに低い旗府官吏養成制度の存在は私塾の価値を弱めたかもしれない。

4．私塾とその言語教育モデル

私塾の言語教育は，農業地域では漢語とモンゴル語（満州語）ーあるいは漢語といった形を取っていたが，半牧半農地域では，モンゴル語一言語教育からモンゴル語一漢語二言語教育へ転換しようとしている段階にあった。純牧畜業地域では，モンゴル語一言語教育が続いていたが，私塾教育と学堂教育の影響で，教育革新の試みも行われるようになった。民国になると，これらの地域では私塾教育が学校教育と同時に発展してきたのもその影響の結果と言えるだろう。

4．寺院教育と言語教育

清朝時代，モンゴル族にとって，官吏教育のほか，もっとも普遍的且つ意味深い教育形式は寺院教育である。寺院教育はその規模，制度の完備性，経済力と政治力，文化的影響力および言語教育の独特性どれからみても，その時代のほかの教育形式に匹敵する存在であった。そういうわけで，清朝の寺院教育について，簡単ながらいくつかの考察を加えることはモンゴル族の教育と言語教育の歴史を理解することに役に立つかもしれない。

A 寺院教育と清朝のモンゴル対策

ここで寺院教育というのは，寺で行われる宗教教育を指している。モンゴル地方では既に元朝から仏教伝統があったが，明朝時代のモンゴルアラタンカンの時から仏経は速やかにモンゴル全地域へ伝えられるようになった。前にも少し触れたが，清朝が建国後，モンゴル地域を徹底的に征服するため，モンゴル人に対して，以下のような政策を採択した。

1．行政的分割

モンゴルの伝統的な部落を行政的に分割して，お互いに統合されない旗と盟などの行政地域を設置した。例えば，喀喇沁部落はあまりにも強大であって，コントロールされない心配があるので，左，右，中といった3つの旗に分けた。この3つの旗にそれぞれの世襲王が任命され，旗全地域はその王に対する封建的関係になるので，本来の部落人の血縁意識が薄くなって，お互いに利益的に対立するようになった。

2．政治的分化

モンゴル各旗に対して，差別的な親疎的な待遇を行って，篭絡と打撃を兼用して，モンゴル上層を分解させた。清朝支配者は更にモンゴル貴族との縁組みを通じて，モンゴル上層と血縁関係をもつようになった。

3．文化的籠絡

官学などの教育手段で政府と皇帝に忠実した官吏を養成した。

4．軍事的弾圧

軍事的手段で反清朝反政府蜂起を弾圧した。喀爾喀とガラダンとの戦争に介入して，ガラダンを弾圧したこと，主に東部モンゴルの軍隊を派遣して西域に起こった反乱を平定したことはそのよい例である。これらの戦争中死傷したのは，勝負両方においてモンゴル人が多い。

5．精神的麻痺

仏教を唱えて，いろいろな優遇措置で仏教のモンゴル地方への発展を奨励したのである。その結果，清朝の支配者は精神的にモンゴル族を束縛して，その人口を減らす目的を達したのである。

前に述べた5つの方針中，第1，2と3は主にモンゴル上層を対象にしたもので，第4と5は主にモンゴル民衆に向けられたものである。そのなか，官吏教育と寺院教育はモンゴル社会を上層と底辺層両方から着手して同化しようとした政策の重要な一環として，いまなお研究すべきものである。

B 寺院教育の流派と規模

1．流派

チベット系の仏教は黒教，紅教，白教，黄教に分けられる。妙丹の「蒙蔵仏教史」の統計によると，黒教は西康，四川省西北部に分布して，寺38処，僧籍5万人いた。紅教は主に新疆モンゴル，西康，青海に分布して，寺579処，僧籍16万人いた。白教は主に西康，青海に分布して，寺500処，僧籍10万人いた。黄教はチベット全域，青海，甘粛，内外モンゴルに分布して，寺1000処，僧籍37万人いたという。モンゴル地方では黄教の勢力は圧倒的な地位を占めていたのである[94]。

2．分布と規模

清朝時代，モンゴル地方の寺院は主に承徳，帰綏，多倫諾爾，庫倫に集中していた。そのほか，各旗にも大きさの様々な寺が分布していた。モンゴルの接近地と清朝

の宗教中心地とした，北京，五台山，奉天にも数多くの寺が建てられたのである。1920年代には，モンゴル人民共和国全域に2600処を越す僧院，10万人以上のラマが存在していたと言われている[95]。この数字は妙丹の記した寺28処，ラマ14000人を遥かに上回っている。戦前の日本人による内モンゴルの寺院調査として，長尾雅人の「蒙古ラマ廟記」，「蒙古学問寺」[96]などが挙げられる。1990年代には内モンゴル社会科学院の研究員喬吉（チャオジ）の「内蒙古寺廟」[97]と徳勒格（デリガ）の「内蒙古ラマ教史」[98]が出版された。喬吉によると，内モンゴル地域では，元代から民国まで1200あまりの寺が建てられたという。内モンゴルの西から東への順序で並べると，阿拉善盟8大寺（「阿拉善盟誌」には：19世紀末，全盟には44処の寺，6400人のラマが在籍していたと書いてある[99]），伊克昭盟には寺243処，烏藍察布盟300処あまり，察哈爾盟と四牧群地域80処，錫林郭勒盟130処，昭烏達盟170処，哲里木と興安盟200処ぐらい，呼倫貝爾盟には一番少ない，約40処あまりの寺があったということになるわけである。仏教の影響は内モンゴルの中部，烏藍察布，伊克昭，昭烏達と哲里木，興安盟に一番強い，阿拉善と呼倫貝爾といった両端に行くとその影響が弱まっていることを寺院分布から推定できる。徳勒格の研究によると，清朝時代には，モンゴルとモンゴル接近地の寺の分布と数は以下の通りである。

北京33処（妙丹の記述からまとめると38処になる，下同）
承徳8処（12処）
多倫諾爾4大廟15附属廟（3処）
呼和浩特大召7，小召8，無名召72（30処）
五台山24処（14処）
沈陽（奉天）10処（10処）

それに，清朝末年まで，内モンゴルの各旗には平均30-40処の寺があって，清朝中葉（乾隆，嘉慶年間），合わせて1800あまりの寺，15万人あまりのラマがあって，ラマ数はモンゴルの男子総数の40-50％を占めていたという[100]。要するに，清朝時代のモンゴル地方の寺とラマ数は研究者，統計年代と標準によってまちまちであるが，その膨大な規模からラマ教のモンゴルの人口，文化，教育に与える影響力を想像することができる。人口的に激減した結果，モンゴル地方に多くの無人地域が現れて，漢族の農業移民を可能にした。学校とは民族文化伝承の中心であって，一定の人口規模に条件付けられる。一方人口が少なく，生徒が少ないため，学校の設置が難しくなって，もう一方教育の強力な支持がないので，遊牧文化が儒学で武装された漢族の集団文化に接触すると抵抗できず，必然的に失敗してしまうのである。

C　寺院の経済力

清朝の時，モンゴル地方の寺院は中央政府の政治的支持のほか，独自の経済力を持っていた。その経済力は出所によって，中央政府の投資，寺院経済，僧衆信者の寄贈といった三つの経路に分けられる。中央政府の投資には寺院建設費，ラマ僧衆の日常生活支出と賞与などが含まれる。

1．寺院建設費

順治11年（1654年），順治皇帝が命令を下して，チベットには黄教寺院62処建てさせた。雍正（ユウセイ）13年（1735年），白銀10万両を出して，恵遠廟を建造させた。雍正5年（1727年），国庫から白銀10万両支払って，慶寧寺を建築させた。雍正2年（1724年），白銀10万両出して，章嘉呼図克図のため，善因寺を建造させた。もしモンゴルとその接近地では少なくとも1000あまりの大寺院があったとしたら，その建築費だけが1億両（白銀）を上回ると推測できる。

2．ラマ僧衆の日常生活支出

順治11年（1654年），順治皇帝の命令で，同年度からチベット，康巴など地方の3070処寺院の経費と食糧は国庫から出すようになった。康熙60年（1721年），京城には大小ラマ938人在籍していて，その茶，油，塩，柴，小麦粉，石炭などの費用，合わせて白銀13175両であった。ここから推測すると，モンゴル地方の僧籍に20万（外モンゴルを含めて）人あまりのラマがいたとしたら，その日常費用は合計白銀280万両/年になるはずである。

3．賞与

清朝皇帝の賞与は主に達賴（ダライ），班禅（パンチャン），哲布尊丹巴呼図克図（ジャブザンダンバホトグト），章嘉呼図克図（ジャンジャホトグト）などの黄教上層に与えられていた。賞与の内容は，金，銀，金銀印判，金銀器具，宝石，虎皮，獺皮，緞子，宝物であった。金，銀だけの賞与を例としてあげると，以下のような事例がある。順治10年（1653年），皇帝と皇太后が第五世達賴ラマに黄金650両，白銀12000両賞与した。康熙14年（1675年），康熙皇帝が達賴ラマに黄金曼達一つ（130両），黄金条一つ（100両），白銀450両賞与した。康熙59年（1720年）1万両，乾隆3年（1738年）5千両，乾隆22年（1757年）1万両，咸豊11年（1861年）1万両，それぞれ達賴ラマに賞与した。そのほか，達賴，班禅額爾德尼（パンチャンエルデニ）が入寂したら，国庫から葬式費として白銀5千両支出していた。清朝年間，達賴ラマ8人，班禅4人在世したので，その葬式費が合わせて白銀6万両に達するはずであるが，「蒙蔵仏教史」に記録されているのは5万両である。哲布尊丹巴呼

図克図と章嘉呼図克図の待遇は達賴，班禅に適わないが，やはり贅沢を極めていた。たとえば，第一哲布尊丹巴呼図克図が入定した後，雍正皇帝は白銀10万両出して，彼のために慶寧寺を建造した。第二世哲布尊丹巴が北京から庫倫へ帰るとき，乾隆皇帝が白銀10万両賞与して，旅費とした。道光28年（1848年），第六世哲布尊丹巴呼図克図をチベットから迎えるため，庫倫を出発した僧衆が5千人いて，旅費だけで白銀15万両使ったという。第三世から第八世までの哲布尊丹巴呼図克図が6人，皆チベット出身なので，その出迎え費用だけで，白銀90万両使ったということである。

4．寺院経済

内モンゴルでは庫倫旗，外モンゴルでは，額爾德尼，札牙，青蘇珠克図，那魯といった四旗がラマ牧地として存在していた。ラマ牧地は呼図克図に管理されて，旗に属しない。呼図克図の下，商卓特巴札薩克ラマという主事があって，その権限は旗の札薩克（行政官）に相当する。牧地のラマは主に牧畜業を営んで，決まった日々に寺院に集まって読経して，兵役などの義務がない。家畜販売，税金などで寺院の日常費用，寺院建造と仏像仏経購入費としていた。そのほか，家畜（群れ）委託管理，仏像仏経販売，供給戸（沙比那爾）なども寺院経済収入の重要なルートであった。乾隆3年（1738年），庫倫の哲布尊丹巴呼図克図の直轄供給戸が急に千戸あまりまで増えて，僧侶総数が3万人に達して，乾隆皇帝の不安をもたらしたことがある。同年，伊犁河の北側に位置していた固爾札廟に6千人あまりのラマがいて，供給戸が10600戸あって，毎度チベットへ供えに行く時白銀20万両あまり使っていたという。「科爾沁右翼中旗誌」によると，この旗には15処のお寺，1000人ぐらいのラマが514120ムーの領地を所有して，これがその時，全旗の農耕と牧畜業に利用できる土地2100万ムーの40分の1を占めていたという[101]。阜新県では，瑞応寺だけで，17村，800世帯の供給戸，53800ムー農地をもって，毎年合計50万キロの小作料を受け入れていた[102]。

5．信者からの寄贈

仏教では，お金や財産を仏様，寺院，ラマに寄贈することを善行という。清朝年間，モンゴルの信仰者は数え切れないほどの財産とお金をこの善行として捧げた。乾隆45年（1780年），第六世班禅額爾德尼が北京で入定した。翌年春，その舎利を入れた金龕を西へ送る時，信者たちの持って行ったモンゴル信者からの寄贈と政府からの賞与は白銀で何十万両を超えて，いろいろの宝物は数え切れないほどであったという。光緒14年（1888年）7月11日，章嘉呼図克図が多倫諾爾で大慶事を行うとき，内外モンゴル信者からの寄贈は数十万両白銀に値するというのである。民国22年，第九世班禅額爾德尼が内モンゴルに行って，数万頭の牛，羊，馬など家畜と現金を大小寺院に寄贈した。実はこれがモンゴル民衆の寄贈したものを，民衆の心を安定させるため，（その時，外モンゴルの独立運動の影響で内モンゴルは非常に不安定な状態にあった）地方に返したのにほかならない。

前に挙げたいくつかの例からもよくわかるように，数多くの僧衆と寺院は清朝政府とモンゴル民衆に大きな経済負担となったが，その力強い経済力が寺院教育の発達に可能性と基礎を与えたのである。

D　寺院の教育制度

モンゴル地方の黄教はチベットから伝えられたもので，その教育制度は宗喀巴（1357-1419）から，第五世達賴ラマと第四世班禅額爾德尼を経て，完備されてきた。もし社会の需要，政治経済的支持を寺院教育発達の外因としたら，教育制度の完備性はその内因と言えるだろう。

1．教育目的の一貫性

仏教を利用する政治的目的のいかんを問わず，仏教自身の目的は人々に善行を勧めることである。釈迦の十大善行には身・口・意という3種類がある。身に関する善行は，生霊を殺さないこと，盗まないこと，姦淫しないことで，口に関する善行は，詐欺しないこと，そそのかさないこと，悪罵しないこと，デマを飛ばさないことで，意に関する善行は，嫉妬しないこと，悪念を起こさないこと，背教しないことである。この身・口・意が一体になって，大功徳を完成させて，仏心になるわけである。この仏心を身につけると，摩尼といったあらゆる善行を集め如意宝珠または宝船を獲得する。そういう仏心を身につけると，蓮華のように汚物濁水から出ても汚染されない，人間の罪悪と苦悶から脱け出して，人間を憐れみ，救うために一生を捧げるようになる。仏心を身につけると，金剛のような不変な志を持って，信仰して始めて，仏法に加護されて，その窮極の真理を悟って，正覚に達することができる。これは六字真言でまとめた仏教の真諦で，その全貌は，とほうもない膨大な仏教体系になる。そのなか，仏部心，宝部心，蓮華心，金剛心と羯磨部心を合わせて五部と言って，仏教の基礎となる。チベット仏教は蓮華部心を強調した密宗で，そのなか，戒律を強調したのは黄教である。

2．教育年齢と段階

ラマ教育は大体6－7歳から始まる。まず地方や近隣の寺で簡単な文字知識を勉強して，わかりやすい経文を

暗記する。1－2年後，試験に合格した者はより大きなお寺に入って，系統的に「五論」を勉強して（4－8年），成績が優れたものが寺院の推薦で，有名なお寺とか，チベットの名寺に入って，もっと高いレベルの学問を勉強する。大雑把に言うと，前の顕宗教育が一般教育あるいは基礎教育に属するもので，大体10年ほどかかるのである。後の10年あるいはそれ以上の教育が密宗教育とか今の高等教育にあたるもので，完成した人にとって生涯教育にもなるわけである。「五論」とは因明，般若，中観論，戒律，倶舎五部学問で，勉強はそれぞれ2－5年かかる。毎部に指定された教科書一経典があり，厳しい選抜試験があるのである。高等教育段階では，密教理論と実践のほか，美術，音楽，建築，医学，天文学などの専門教育が行われる。モンゴル地方では，乾隆3年（1738年），庫倫僧学院が設立され，経典と建築方法を教えていた。乾隆25年（1760年），庫倫医学院，乾隆55年（1790年）庫倫星学院が建てられた。内モンゴルの寺院では，密教学，時輪学，医学，顕教学などが研究されるほか，順治7年（1650年）に建てられた庫倫旗興源寺に49旗のラマが集まって，経典を研究していたという[103]。

3．試験と学位制度

寺院教育の試験には暗誦，答弁，論文という3つの方法がある。一等生は350-400ページ（毎ページ630字），末等生は50ページ暗誦しなくてはならず，内容は主査に指定された文節または全文である。答弁には指定と非指定の区別があり，前者の場合，問題は一定の範囲に限られるが，後者の場合，問題は勉強された全内容に関わる可能性がある。期末になると，生徒たちが勉強した内容について短い論文を書くように要求される。試験に合格しない者は落第したり下のクラスへ移動されたりする。最悪の場合は，生徒が試験に落第すると，その先生も連帯責任を負って処罰される。

学位の分類は教派と寺院によって多少違うが，四等に分けられるのが一般的である。第四等学位は初等学位で，五論の基礎知識を身につけたものに対して，寺院から命題した試験を通じて，授与される。大寺院の最高機関から問題を出して，期末集中試験を通じて授与されるのが第三等学位である。第一次試験と法会での第二次試験を通じて授与されるのが第二等学位である。五論別の試験と答弁を通じるか，第一，第二次（大法会で行われる）試験と答弁を通じて授与されるのが第一等学位である。その試験に達賴とか政府官吏が出席して，公証するばかりでなく，試験の結果は特別試験委員会の判定を通じて，政府と達賴に認められた後，公表される。候補者に人数限定があり，優勝者が奨を与えられたり，名誉と地位を与えられたり，社会的に評価されるようになる。顕教と密教に精通して，密教法王まで昇進したものに最高学位を授けする。最高学位とは学問の実力で与えられる最高名誉で，それを獲得するのに生涯の努力が必要になる。寺院学位制度は寺院教育を評価する基準を与えたばかりでなく，それ自身も僧衆たちの終身奮闘の目標になったのである[104]。

E　寺院教育とその言語教育特徴

モンゴル地方の寺院教育は，言語教育の視点から見れば，特別バイリンガル教育に属する。その教育目的語はチベット語で，媒介語はモンゴル語で，それぞれ独立した文字システムによって表現されている。言語教育の環境はチベットから遠く離れたモンゴル地域で，ラマ生徒たちは寺という限られた環境で，話し言葉から切り離された経典言語でチベット語を勉強する。これは一種の特別な言語教育とも言えるかもしれない。これまでにこのような言語教育を系統的に整理して分析した研究は，非常に少ない。以下の分析は筆者自身の整理によるもので，いくつかの気付いた特徴だけをまとめてみた。

1．言語威信の利用

第二言語としてどのような言語を勉強するかを決定するとき，すなわち，言語選択が行われるとき，まずその言語の有用性とか実用性を考慮するのがあたりまえのことである。使用人口が多く，長い歴史と豊かな文献をもって表現力に優れた言語は威信が高いので人気を呼んで，多くの人々に勉強される。しかしモンゴル人にとって，チベット語の魅力はその内容にあるのである。チベット語は宗教言語で，仏教の真理を伝達する言語である。真理を追い求めて，それを硬く信じるのが数多くのモンゴル人がチベット語を勉強するさいの動機となったわけである。言語学習の動機が強ければ強いほど，その効率が高くなる，だからこそ，信念もしくは信仰から知恵が出ていることになる。このことから，言語威信が目的語の伝える内容と勉強者の心理状態に深く関わっていることをよくわかる。

2．教具とたとえの利用

仏教に懺悔，舎利，真言，法軌といった四つの方法がある。懺悔というのは真理の勉強は自己反省から始まると，物事，過程，是非が具体的な，体験的なものになって，理解が容易になるということである。舎利とか舎利金塔というのが，仏滅した後，塩でその遺体を処理するとき，遺体から出た血水で作ったもので，信者がそれを拝見して，肉体から離脱した仏の法体，即ちその精神世界を悟ることができるという。真言というのは，六字真

言で，仏部心，宝部心，蓮華部心，金剛部心などの具体的な物のたとえでまとめた仏教理論の中心内容である。法軌というのは，仏教の修行次第ルールで，学派によって別々であるが，四つの便利さ，即ち発心の便利さ，懺悔の便利さ，修学の便利さ，証入の便利さがその基礎となる。確かに身近い事柄から始めること，教具を利用すること，テーマ別にまとめること，便利さなどは言語教育の重要な原則として，今でも重視されている。

3．集中，分節，漸進，修行原則

集中とは教育場所の集中，教育時間の集中，教育内容の集中と注意力の集中などを含めている。生徒たちは労働勤務から相対的に離れて，各地の寺院に集中して，仏教を勉強している。その生活は一定の決まり，分業と組織原則に従って進むので，個人生活は非常に簡潔化されて，集中的な学習が可能になっている。場所の集中は寺院の地理的位置，伝統的知名度，施設と学問的な力，とりわけ言語教育の段階によって，その程度も違うのである。一年の決まった季節，一日の決まった時間に授業が行われるので，教育時間は集中している。教育内容の集中とは，一定の段階において，決まった内容が与えられていることである。注意力の集中には入定の技，持続時間と勉強の効率などを含めている。現代言語理論では，この分野の研究と実践はあまり充分ではないと思われる。分節とは，言語教育の過程がいくつかの合理的な段階に分節化されて，その段階に適応した教育目標，教科書，試験と学位制度を確立することを指している。漸進とは，言語教育がわかりやすく面白い直観的なものから，より難しく，あじけない抽象的な内容へ段階的に展開することである。言語教育の最初の段階では，物語，伝説，詩などがよく使われて，文法，修辞，言語ロジックなどの内容が次第に加えられている。文法的にも，口伝の秘訣など覚え易く，かつ読み易い形でチベット語の決まりをまとめて，生徒たちに暗記させていた。

4．暗誦，朗誦，黙想，答弁

チベット語の勉強はモンゴル人にとって，特別な言語教育に属すると前にも述べた。言語環境がないところで言語を勉強するとか，話し言葉と違う書き言葉を勉強するとき，暗誦は有効な方法の一つである。言語は一種の自然な過程である。その単語，文法，文型などを考えも考えずに話してしまうのが言語活動の本質的な特徴の所在である。即ち言語活動は分析より統合的，知的より動的，理解優先的より表現優先的な活動であるということを意味している。

暗誦のプロセスは大体聞くこと，総合的音声イメージと分節された音声パターンの形成，そのイメージとパターンを模擬した黙読から成り立っている。子供の言語習得の第一年はこのプロセスにあたるが，成人のこのプロセス，特に具体的な文章に対しての暗誦プロセスはそれほど長くない。子供の言語能力の驚くべき進歩の秘密がこのプロセスに潜在する。暗誦のもっとも有効な段階は黙読である。もし子供が勉強（真似）している基本的な単語，文法，文型と文体が子供の生活環境そのものに決められたとしたら，大人に暗記させる内容とそれに現れる基本的な（頻度の高い）単語，文法，文型，文体と文章の長さは統計的な方法で処理することができる。暗誦は言語エネルギーのかたまりであって，後の言語火山が爆発する前提になっている。暗記するべき言語素材の総量について，正確な研究はまた発表されていないが，寺院教育では50ページから400ページ，即ち，31500字から252000字，李陽に唱えられている英語勉強法では，本10冊と主張している。

朗誦には独唱と合唱の２つの方法があるが，いずれも，音声イメージから言語発生へ，内部言語から外部言語へ転換するときに避けられぬ道である。声を出して読んで，自分の発音が正しいかどうかを確かめる，暗記したものを朗誦して，音声フィードバックによって，記憶を更に強めるのが朗誦の主な機能である。独唱の場合，実際の発音と耳に届いた音声イメージが少し違うので，朗誦したものを録音して，後で流して聞くのが発音校正に利く。合唱は，記憶を強める，本を見なくても，忘れた部分を全体にしたがって読めるという利点がある。朗誦が久しく続けると効率が低くなるので時間の把握は重要である。それに，生き生きとし，起伏のある朗誦は疲れを消して，記憶を強めるのに役立つ。

言語は思想の負荷体と媒体である。言語があって始めて，思考が組織的に，順序的に行われるようになる。言語の流暢性は思考の流暢性につながっている。言語が言語として成立するのは，ばらばらの言語要素が意味によってお互いに結び付けられているからである。言語の勉強は最初からその意味連関に恵まれている。例えばまったく意味のない記号を覚えるのが難しいであるが，意味ある言語連鎖はすぐ覚えられる。言語に伝えられた内容を一般的な理解からその概念と本質まで深く考えるのが黙想である。黙想が行われる時，内容は対象になっているが，言語媒体自身が無意識に使われる段階に入ってしまう。これは言語習得の大きな飛躍である。黙想の段階では，意味を中心に，意味の再建，言語の再建が行われる，つまり，言語創造が行われるということになる。たとえば，「鳥は白い」という文を暗記したとき，日常の体験から白い鳥，黒い鳥，黄色い鳥，いろいろな鳥

が考えられるので，鳥は白いのであろうかという疑問から「鳥は…である」，「鳥はいろいろである」という一般化に達する。この段階は大体子供の言語習得の独り言時期にあたるので，独り言を黙想の外面化と言ってもよい。

答弁は言語の総合応用の段階である。大勢の前の学問的な論議はともかく，個人間の問答も答弁の性質にあふれている。議論されているテーマ（内容）とそれを表現する言語に熟達するのが答弁の前提である。そこまで行くのに，暗誦，朗誦，黙想と問い答え練習が有効な方法であるということはモンゴル寺院教育の実践で十分証明されたのである。当然のことであるが，暗誦とか暗記とは，言語習得の方法の一つであって，意味習得とか学問勉強の方法ではない。言語習得方法としても，その場によって，いろいろな方法があることは言うまでもない。

F　仏典翻訳と寺院教育のモンゴル文化への貢献

寺院教育では，二言語教育というのはモンゴル語とチベット語の教育を指している。寺院と僧衆の使命は仏教の教義を民衆に伝えることである。そのために数多くの仏教経典を翻訳するほか，仏教教義をその地方の言語で一般民衆と小僧たちに対して，わかり易く説明できる，チベット語とモンゴル語に熟達した人材を養成することが必要となっていた。その結果，寺院教育からモンゴル語，チベット語ないし梵語に精通した多くの学者が出たばかりでなく，モンゴル語の文法研究，修辞研究，辞典編集，翻訳理論研究，モンゴル歴史研究とモンゴル医学の形成を大いに促進した。

1．モンゴル語音声記号の発明と文字システムの改善

モンゴル語で話す生徒たちにチベット語を教えるとき，何よりもチベット語の発音を正しく標記できる音声記号が必要になっていた。元朝時代（1269年），八思巴（パスパ）ラマは元世祖の命令でモンゴル新文字を作った。その後の人々に角文字と呼ばれたこの文字は，チベット文字システムに基づいて作られたもので，モンゴル語，中国語，チベット語などを記録，標記するのに使われていたので，実際，一種の音声記号の性格を持った文字システムである。この文字がいろいろな分野で使われていたが，歴史上残された文献[105]を見ると，宗教関係のものが多い，寺院といった宗教施設に保存されたものが多いことが注目される。1589年モンゴル喀喇沁部の阿尤喜（アユーシ）という訳者がチベット語と梵語を標写するため，阿利伽利（アリガリガ）文字を作った。1648年，衛拉特（オイラド）モンゴルの高僧那木海札木蘇（ナムハイジャムス）という人は，衛拉特モンゴル方言に適応した托忒モンゴル字を作った。1686年，喀爾喀モンゴルの札那巴斯爾（ザナバーズル）という人は梵語文字とチベット文を参考にして，蘇永布（ソヨンブ）文字を作った。これらの文字を設計するために，モンゴル語とチベット語ないし梵語の音声システムと文字システムを詳しく研究する必要があったので，当時の音声学，文字学の発展を促したのである。八思巴文字の標記システムは漢字，回鶻モンゴル字よりずっと精確なので，その文献が中世紀のモンゴル語と中国語の音韻システムを研究する貴重な資料となったのである。阿利伽利などの文字記号が回鶻モンゴル文字システムに数多く受け入れられて，その標記の精確さと機能を大きく高めたのである。

2．文法研究

文法研究は言語教育に対して重要である。大体1723-1735年の間，丹賛達格巴（ダンザンダグバ）の書いた「蒙文啓蒙詮釈正字蒼天如意珠」が公表された。この文法は先人の文法研究の結果をまとめて，後の時代の文法研究に強く影響を与えたので，西方文法理論が導入される以前の文法研究の里程標と言ってもよいほどであった。この文法はチベット文法に影響されたのが明らかで，モンゴル文字の歴史と文法研究史，文字の基本的ルール，格の意味と形式的分類を中心とした文法そのものからできていて，モンゴル語の文法規則を簡潔ではあるが明瞭に説明している[106]。

3．仏教経典の翻訳と辞書編集，翻訳理論の発展

仏教経典の翻訳はモンゴル地方で太古の元朝から始まり，清朝に入って，その全盛期を迎えた。この時期，数え切れないほどの経典がチベット語からモンゴル語に翻訳されて，その絶頂になったのは，13世紀から18世紀にかけて完成された「甘珠爾（ガンジュール）」と「丹珠爾（ダンジュール）」の翻訳である。この間，いくつかのチベット－モンゴル辞書が編集され，満州－モンゴル－漢各種類の辞書と共に，近代モンゴル辞書編集の先導者となったのである。翻訳理論もかなりの発展を遂げた。多くの医学書がモンゴル語に翻訳されるにつれて，チベット医学がモンゴルに伝えられ，更に地方に広まった。「四部医典」の翻訳から「蒙薬正典」の出版までの発展はその証拠である。

4．モンゴル語で書かれたモンゴル歴史，文学作品の出版

モンゴル語教育は寺院教育に恵まれて，大いに発展した。モンゴル語とチベット語に熟達した学者たちは仏典の翻訳にとどまらず，モンゴル語で歴史と文学関係の本を書き始めたのである。「内斎托音（ナイチトイン）伝」，「札雅班第達（ザヤパンディダ）伝」，「章嘉呼図克図伝」などは名僧の伝記なので仏教とのつながりは明らかである。同じことは，「モンゴル宗教史」（禅巴拉（ザンバラ）1819年），「モンゴルラマ教史」についてもいえるだろう。「モンゴル溯源史」，「水晶鑑」，「水晶珠」，「黄史」，特に「モンゴル源流」と「黄金史綱」などは，

宗教との関連は少なくないが，基本的に独立した歴史研究の道を辿り始めたのは明らかである。文学作品には，「羅摩衍那」，「薩迦格言」，「魔屍の物語」などの翻訳とか翻訳と編集を通じて作られた仏教の物語が多いが，史詩「格斯爾」はモンゴル文学の創作が仏典訳作から離脱して，民間伝説，口碑文学などに充実されて，独特のスタイルを持つようになった[107]。「格斯爾」は胡弓芸人を通って，後世のモンゴル胡弓芸術，詩と歌に影響を与えて，言語芸術などで近代小説にも影響を与えたので，外モンゴルの学者達木丁蘇栄に「モンゴル文学の三つの頂点」の一つとされたのである。

要するに，既に元朝のモンゴル文が公文書によく使われていたのであり，清朝のときからモンゴル文は宗教に支えられて，更に歴史，文学，辞書，医学，天文などの広い分野にわたった民族文学標準語に発展したのである。このプロセスに寺院言語教育の貢献は確かに多い。仏典の印刷で印刷業の発展も大いに進んで，当時モンゴル民族の文字文化の中心は寺院にあったといっても過言ではなかった。

G　寺院教育の衰微

清朝のモンゴル地方の寺院教育は政府の政治的な目的によって支えられ，発展させられたものなので，その政治的目的の到達にしたがって衰えて，その政治的力の崩壊に従って崩壊するのが当然のなりゆきである。

1．政治的策謀と仏教への恩寵

崇徳4年（1639年）頃，清太宗は教書を出して，第五世達賴ラマを招請した。三年後，達賴ラマの使者が盛京に到着するとき，太宗を始めとして文武百官が懐遠門を出て，三回ひざまずいて，九回頭を地に付ける礼で迎えた。崇徳8年（1643年），太宗は使者を派遣して，清朝の子々孫々が達賴と班禅の施主になりたいと表示した。順治5年（1648年），前後三回達賴ラマを招請した。順治9年（1652年），達賴ラマが来京の意願を表示して，参拝するところは帰化城と代葛地方のどちらがよいか指図を仰ぐとき，順治皇帝は王公大臣にこう命令した。

> 太宗皇帝のとき，喀爾喀地方1箇所が従わなかった。外モンゴルの人々はラマの言葉にしか従わないので，達賴ラマを招請したのである。...今達賴ラマは3千人の随員を引き連れて，こっちへ来ているという。私は辺地まで迎えに行って，達賴一行を辺地に宿泊させたいと思う。外モンゴルの達賴に参拝したがっている貝子などはそのところで参拝したほうがいい。もし達賴を内地に入らせたら，年収が少ない，それに達賴の随員も多いのでわが国に無益になる恐れがある。もし出迎えに行かなかったら，せっかく招請されてきたものが途中で帰って，喀爾喀部の帰順を妨げる恐れがある。いったい出迎えに行くかどうか，所見を聞かせてくれ。

大臣たちが相談した結果，有名な「礼敬達賴，而不入其教」（達賴を礼遇するが，その教に入らない）方針が打ち出された[108]。第五世達賴ラマが北京から帰ろうとしているとき，皇帝は達賴の意見を諮問するかどうか大臣たちに協議させたが，以下のような2つの意見が提出された。

> 意見一：達賴ラマは本来特別に招請されて来たので，もし何か諮問しないと，達賴一行は憤然と行き去って，喀爾喀，厄魯特各地はきっと反乱を起こす。彼の言葉がわれわれに有利であれば，採択して，そうでなければ放っておく。達賴の意見は聞かなければならない。
>
> 意見二：達賴に何も諮問しないほうがいい。もし意見を聞いて，言ったことに従わないと，達賴も怒って帰ってしまう。しかもわれわれは天に助けられて，各地を征服して，大業を成就した。その時，達賴なんかいなかっただろう。特別に招請したとしたら，金銀緞子とお金をたまわって，名誉を送って，冊と印を与えて，意見など諮問しないほうがいい。

順治皇帝は意見二を採択して，達賴に高い名誉を封じて，厚く下し与えて，ほかに政見など何も諮問しなかった[109]。

2．モンゴルの柔順と仏教に対する態度の変化

康熙52年（1713年），モンゴル各部は康熙の60歳を祝うため，承徳で溥仁，溥善2つの寺を作った。溥仁寺碑文に康熙皇帝は

> モンゴル部落は三皇に治められず，五帝に服従しなかったが，今は内外無差別になった。

と自慢気に宣言した[110]。乾隆57年（1792年），乾隆皇帝は「御製ラマ説」を作って，満州，モンゴル，チベット，漢四つの文字で碑に書かせて，北京の雍和宮に建てさせた。この碑文は清朝の宗教政策のもっとも重要な文献で，ラマ教に対する宣言ともいえるである。以下はその主な内容をまとめたものである。

> 1．黄教を興したのはモンゴルを懐柔するためで，したがってこれは油断できない且つ保護しなければならないことである。
>
> 2．僧家には子供がいないため，（学問を）生徒に伝達する。だから生徒もその子になるわけで，賢くかつ福相があるも

のを選んで，まず勉強させて，後成人になったら呼図克図とする。仏には本来生きることがなければ転生もないはずである。しかしだいま転生する呼図克図がないとしたら，数万僧衆が帰依するところがなくなるので，仕様のないことである。

3．しかし転生する呼畢勒罕（ホビラガン）がいつも同じ家族から出るのは私心である。仏道には私心を許さないので禁止しなければならない。今日，金瓶を作って，チベットに送らせた。転生する呼畢勒罕の候補者の名前を書いて，金瓶に入れる。後はくじで最後の入選者を決めるべきである[111]。

3．仏教への冷遇

道光（ドウコウ）元年（1821年），第五世哲布尊丹巴呼図克図が入朝したいと表示したが，道光帝に婉曲に拒絶された。これに対して妙丹大師は，その時清朝廷は喀爾喀人の柔順したことを見て，哲布尊丹巴呼図克図に対する優遇と礼儀を撤回したと指摘した。道光14年（1834年），哲布尊丹巴呼図克図が再び入朝の要求を提出した。今度清の朝廷がその要求に同意したが，往来の費用は自分で負担すること，随員は少ないこと，モンゴル俗人に課税しないこと，といった厳しい条件を付加した。その時から朝廷とモンゴルのラマ上層との間，特に外モンゴルのラマ上層との間に，絶えず摩擦が起こって，ついに宣統3年（1911年）10月に外モンゴルの独立をもたらしたのである。

4．政治と宗教連盟の瓦解

モンゴルを服従させるために仏教を興して，モンゴルが柔順した時，仏教も冷遇されるようになった。何度かの戦争を経て清朝の政治的支配力と経済的支持力が更に衰えて，仏教どころか自分のことにも手が回らなくなって，辛亥革命によって政権が覆されたのである。清朝の政治と経済的力に支えられていたモンゴル仏教はその基礎が失われると次第に衰微していくのが当然のことである。あちこちに起こる革命と戦争で多くの寺院が破壊されて，経済的に困った僧衆もやむをえず次々と寺院を離れた。しかし民衆と社会から離脱して長い間仏道に夢中になっていたこれらの人が社会生活に戻るのにかなりの時間がかかったのである。生産知識と能力がない，家族もない，寺院生活に慣れた人が凡人の生活に入るのがいかに難しいかは考えてもよくわかるのである。外モンゴルではラマたちは人民革命を反対した反乱を起こして，厳しく弾圧された。内モンゴルでは，そのような大規模の粛清がなかったが，民族独立，政治的傾向，生計などが原因で，いろいろな武装集団，戦争，反乱，運動に参加して殺された人も数え切れない。最後にラマたちの生計の力となったのは，モンゴル語と文字の能力と医学である。僅かではあるが，モンゴル語と文字に優れたラマには学者，教師とほかの仕事に就職して，社会に認められた人もいるし，医学の知識を生かして，医者になるとか，医学研究をして，社会に寄与している人もいる。

5．仏教遺産の二重性と文化対策の二重性

仏教がモンゴルの社会に数多くの貴重な遺産を遺したのは事実である。しかし封建政治の仲間になって，モンゴルの民衆を麻痺して，モンゴル社会と文化の発展を妨げたのはその罪悪である。文化遺産についても，その閉鎖的，消極的，社会生活から離脱した性格に注目すべきである。社会，政治，経済などの関係から仏教寺院教育を分析して，そのシステムの反動性を否定すると同時に，その合理的な部分，特に言語教育の経験とやり方を参照的に利用することは，これからのモンゴル教育と言語教育の重要な課題である。

5．結　論

本稿では清朝時代のモンゴル族教育と言語教育を史料によってまとめて，その特徴を分析することを目的とした。分析の結果をまとめると，以下のようなものが総括される。

A　教育システム

清朝時代のモンゴル族教育システムが官学，学堂教育，地方教育と寺院教育から構成されている。前期には，官学，地方教育と寺院教育が同時に取り上げられて，官吏養成，平民調教，布教などの異なったレベルで機能していた。後期では，学堂教育が官学，部分的に地方教育の書院，私塾に取って代わって活躍するようになった。学堂教育には部分的に科学技術教育内容が導入されたが，清朝時代のモンゴル族教育を全般的に見ると，儒教を中心とした封建官吏教育と民衆の教化を目的とした宗教教育の2つのカテゴリーに分けられる。

B　教育宗旨

清朝のモンゴルに対する教育宗旨は，モンゴルを同化して忠実な国民を養成することである。清朝支配者は自身と漢族の関係から，同一の国民に異なった文化，言語と歴史を持ったいくつかの民族が存在することは可能であると知っているが，モンゴル族には特別な同化的，根絶的政策を実施した。このことはその政治体制の封建性と腐朽性，文化観念の偏見と閉鎖性から説明できる。清朝のモンゴルに対する同化手段と措置として，軍事的弾圧，ラマ教による精神的麻痺，移民によるモンゴル地域

への蚕食，行政手段による分割と人事制度によるモンゴル上層に対する腐食と籠絡などが挙げられるが，その中もっとも重要且つ永久的な結果をもたらしたのは教育である。宗教と教育をあわせてほかの民族を徹底的に滅亡させる方法を発明したのはこの清朝で，後世に真似される手本となったのである。

C　教育と文化の二重性

教育と文化は政治と意識形態に左右されるが，政治そのものではない。特に清朝末期の教育と文化は世界全体情勢と革新思想の影響で，その時の漢族地域ばかりでなく，モンゴル地域にも新概念，新思想と価値観を吹き込んで，モンゴルの教育と社会の発展を大いに促進したのである。ただ民族同化と迫害に利用された消極的な面は必ず批判されるべきである。

D　二つの文化影響の比較

宗教によるチベット文化のモンゴルに対する影響は大きなものであった。しかしこのような影響は特定の範囲に限られて，人口と精神などを除いて，社会生活の根本を動揺させるまでに至らなかった。これと対照的に，移民による漢族の影響は単なる文化にとどまらず，モンゴルの社会全体を変容させた。遊牧経済から農業経済に転換することによって移動生活が止められて，定着した村生活を送るようになった。都市，交通，商業の発展が数多くの移民を引き付けて，モンゴル人と漢人の人口比率が逆転して，モンゴル地域には農業経済と文化が圧倒的な優勢地位を持った漢人社会が形成した。文化とはそもそも生活そのもので，言語とはその文化の負荷体と媒体にすぎない。社会生活が変容すると，その文化，文化負荷体と媒体も変わるわけである。言い換えれば，文化と言語転換は経済生活を中心とした社会全体の転換を前提にするということである。学校教育はその転換を促進する機関なので，まず農業地域から始まって，漢語を強調するのが当然のことである。

E　文化転換の漸進的性格と言語教育モデル転換

社会変容と文化転換はいかに政治的に支えられ誘導されても，瞬間的に実現するものではない。この過程において経済的，文化的ないし政治的衝突がしばしば起こるので，漸進的に，時々妥協して，周辺地域から中心地域へ，上層から下層まで，都市から農村へと徐々に進んでいく。社会変容と文化転換の漸進的性質から本稿にまとめた言語教育モデルの転換とその方向性が説明される。その傾向は民族関係と社会生活に根本的な変化が起こるまで，たとえ政治的支持が崩れても，逆転しない。このことを明らかにするため，続いて，民国時代におけるモンゴル族教育と言語教育を研究することにしている。また，教育，言語教育と政治，経済ないし社会全体との関係を究明するため，独立したモンゴル国の教育とも比較する必要がある。これは今後の課題にしたい。

（指導教官　藤田英典教授）

注

1）言語教育という概念に，言語を一つの科目として教えることと，授業言語として使うこと両方を含めている
2）モンゴル仏教はチベット系の仏教なので，お坊さんの変わりにラマを使うことにした
3）『皇朝文献通考』第63巻，学校考一，p.5435，第64巻，学校考二，p.5441
4）『清太宗実録』　第10巻，p.28
5）劉世海編『内蒙古民族教育発展戦略概論』内蒙古教育出版社，1993
6）『清会典事例』中華書局，第1200巻，p.940
7）1589年，モンゴル喀喇沁部の訳者―阿尤喜という人が作った文字。チベット語と梵語を標記するのに使われていた
8）大体書記官にあたる
9）前掲書，第1167巻，p.634
10）同上，p.638
11）『帰化城庁誌』第４巻，学校
12）『古豊識略』地部，第15巻，官学
13）『綏遠通誌稿』第50巻，教育
14）『準格爾旗誌』内蒙古人民出版社，1993
15）『莫力達瓦達斡爾族自治旗誌』内蒙古人民出版社，1998
16）『呼倫貝爾副都統衙門冊報誌稿』
17）鄒尚友と他『呼倫貝爾概要』下冊，1930，p.86
18）楊暁　曲鉄華　1989　清代的八旗官学　民族教育研究　第１期，pp.79-83
19）『喀喇沁左翼蒙古族自治県誌』遼寧人民出版社，1998
20）モンゴル語，大体知事にあたる
21）『赤峰市誌』内蒙古人民出版社，1996
22）前掲書
23）貢桑諾爾布『関於創辦蒙古学堂的呈文』中国第一歴史档案館理藩院全宗蒙旗類
24）同注21
25）同注５
26）同注13，pp.281-282
27）『清徳宗実録』第581巻
28）同注13，pp.281-287
29）『清朝続文献通考』第105巻，p.8645
30）『綏遠通誌稿』第74巻，民族　1936
31）『宣統政紀』第36巻

32)『科爾沁左翼後旗教育誌』初稿上冊，1986，p.21
33) 同上pp.18-20
34)『東三省政略』
35) 葉大匡　春徳『調査科爾沁左翼後旗報告書』宣統二年（1910年）
36) 東三省総督錫良『諭哲里木盟十旗興学勧業文』石印本
37)『哲里木盟教育誌』1989，p.17
38) 程厚　郭文田『科爾沁左翼前賓図郡王旗調査書』宣統二年（1910年）
39) 同注19
40)『阜新蒙古族自治県誌』遼寧民族出版社，1998
41) 蔡風林　1992　清末蒙古族教育　民族教育研究　第3期　p.82
42)『前郭爾羅斯蒙古族自治県誌』遼寧民族出版社，1993
43)『杜爾伯特蒙古族自治県誌』黒龍江人民出版社，1996
44) モンゴル語，貴族の等級
45) 同注34，学務　趙爾巽『奏陳籌辦奉省学務情形折』
46) 同注41，p.83
47)48)『吉林省誌』吉林人民出版社，1992，第37巻，p.396
49) 歴史上，しばしばモンゴル族と扱っていたが，実は別々の民族である。達斡爾はモンゴル系の言葉，鄂倫春と鄂温克は満州一通古斯系の言葉を使う。文字なし
50) 同注41，p.82
51)『海拉爾市誌』内蒙古人民出版社，1997
52) 同注15
53)『呼倫貝爾盟民族誌』内蒙古人民出版社，1997
54)『鄂温克族自治旗誌』中国城市出版社，1997
55) 同注31，第10巻
56) 同注41，第2期，p.74
57) 黒龍江档案館と他編『黒龍江少数民族』1985，p.336
58)『東三省総督錫良奉天巡撫程徳全令栄徳翻訳教科書』宣統元年七月，遼寧省档案館
59) 同上，『東三省総督錫良奉天巡撫程徳全発行教科書札』宣統二年二月
60)『蒙蔵回地方興学章程』宣統三年二月九日，中国第一歴史档案館理藩院全宗蒙旗類，第301巻
61) ？亦塵編『清季蒙古実録』下輯，p.430
62) 姚錫光『籌蒙芻議』光緒刊本
63)『帰綏県誌』教育誌
64)『包頭郊区文史資料』第1輯，pp.61-63
65) 同注43
66) 嶋田道彌『満州教育史』青史社，昭和十年十二月，p.644
67) 同注13，第50巻，教育
68) 同注11
69) 同注13
70) 同注21
71) 同注19
72)『巴彦諾爾盟誌』内蒙古人民出版社，1997
73)『烏拉特前旗誌』内蒙古人民出版社，1994
74) 同注72
75) 同注21
76)『紅山文史』第1輯
77) 同注21
78) 程厚　郭文田『科爾沁右翼後鎮国公旗調査書』宣統二年（1910年）
79) 程厚　郭文田『科爾沁右翼前札薩克図郡王旗調査書』宣統二年（1910年）
80) 程厚　郭文田『科爾沁右翼中図謝図親王旗調査書』宣統二年（1910年）
81) 葉大匡　春徳『調査扎賚特旗報告書』宣統二年（1910年）
82)『哲里木盟科爾沁右翼扎賚特旗通誌表冊』，1917
83) 同注36
84) 同注35
85) 葉大匡　春徳『調査科爾沁左翼中旗報告書』宣統二年(1910)
86) 同注37，p.36
87) 同注19
88) 同注40
89) 同注43
90) 同注53
91) 同注17，『呼倫貝爾誌略』教育，p.228
92) 同注54
93) 同上
94) この部分に利用されている資料は，特に明示したところを除いて，主に妙丹法師の『蒙蔵仏教史』によって，筆者が整理したものである。妙丹『蒙蔵仏教史』全国図書館文献縮微複製中心，1993
95) 和光大学モンゴル学術調査団『変容するモンゴル世界』新幹社，1999，p.68
96) 長尾雅人『蒙古ラマ廟記』，『蒙古学問寺』
97) 喬吉　編著『内蒙古寺廟』内蒙古人民出版社，1994
98) 徳力格　編著『内蒙古ラマ教史』内蒙古人民出版社，1998
99)『阿拉善盟誌』方誌出版社，1998
100) 同注98
101)『科爾沁右翼中旗誌』内蒙古人民出版社，1993
102) 同注40
103) 同注5
104) 杰当・西饒江措　1990　チベット民族の古代教育史概要　民族教育研究　第3－4期
105) 照那斯図『八思巴文字とモンゴル文献Ⅱ文献集』東京外国語大学アジアーアフリカ言語文化研究所出版，1991
106) 拙著『現代モンゴル語動詞文の研究』民族出版社，1995
107) 拙文　一部新発見的蒙古文『格斯爾』　中央民族学院学報　1989
108) 同注94，pp.62-63
109) 同上，p.66
110)『御製溥仁寺碑文』

111) 雍和宮碑『御製ラマ説』